

Digging Up



立命館大学考古学・文化遺産専攻

2023



五条坂京焼登り窟（旧藤平） 東の窟一の間の様子



五条坂京焼登り窟（旧藤平） 東の窟二の間の様子

序

1985年に和田晴吾先生が立命館大学に着任されてから、40年近くがたとうとしています。皆さん、元気にお過ごしでしょうか。予想もしなかった感染症により、2020年度は学生が大学へ来ることもできませんでしたが、ようやくコロナ感染が弱まり、日常を取り戻しつつあります。その間、高正龍先生が退職され、2022年度は教員3名でしたが、2023年度からは岡寺良先生を迎えて、ようやく4名へと体制を整えました。大学院においては、新たに博士前期課程に6名、博士後期課程に1名の大学院生を迎え、学部の4つのゼミも活発に動き出しました。今年の春は格別ですね。そのような中、卒業生が論文を公開できる刊行物を研究室で用意したいという思いから、刊行が滞っていた立命館大学考古学論集と年報(Digging Up)を一つにまとめ、考古学実習の発掘調査速報を盛り込んだ内容で、新たな刊行物『立命館大学考古学研究報告-Digging Up-』を発行することにしました。これは印刷物としても刊行しますが、誰もが読むことができるよう、販売はせずにPDFで公開します。

皆さんの文化財に関する活動や研究の成果を是非お寄せください。これを通して皆さんとともに文化財の保護と活用を考え、考古学研究において切磋琢磨する機会になればと願っています。そして、刊行物として充実したものになればと希望しています。

考古学・文化遺産専攻主任 長 友 朋 子

目 次

2022 年度考古学実習の調査概要報告

五条坂京焼登り窯（旧藤平）の発掘調査と三次元計測	木立雅朗	1
--------------------------	------	---

研究論文

近畿・東海・南関東沿岸部における南海産貝類の分布調査	吉田有岐	5
— 打ち上げ貝の破損形態別比率を中心として —		
弥生時代の明石川流域集落遺跡における人口研究	木村友哉	17
備前焼大甕の容量変遷とその要因	立花唯翔	29
— 内容量記載資料の分析を中心に —		

2022 年度年報

2022 年度の考古学・文化遺産専攻および専修の活動報告		47
------------------------------	--	----

五条坂京焼登り窯（旧藤平）の発掘調査と三次元計測

木立雅朗

はじめに

五条坂京焼登り窯（旧藤平）は、1909（明治42）年、京都陶磁器合資会社によって築造され、1943年に藤平窯業（後に藤平陶芸）に移管され、1968（昭和43）年3月まで稼働していた、近現代の京焼登り窯である。

本遺跡の調査は考古学・文化遺産専攻の実習科目「考古学実習Ⅲ」の一貫として、2021年度に実施する予定だったが、コロナ禍のため延期し、2022年8月17日～9月22日に実施した。調査では発掘調査とSiM-MVSを用いた工場の三次元計測を行った。コロナ禍の下、真夏にマスクをした発掘調査になった。なお、発掘現場といえは野外調査が一般的だが、本遺跡では覆屋内の登り窯と工場の調査が主体であった。学生たちは下宿や自宅から通いで観光地・五条坂に通ったが、まだ観光客が十分に戻っていなかったことが幸いであった。本原稿を執筆している2023年4月現在、観光客は急速に増加している。

また、本調査は近現代考古学・民俗考古学、および近代産業遺産の調査であり、一般的な遺跡とは異質な部分を含むが、調査自体は伝統的な考古学の手法を基本としたものだった。三次元計測については近年急速に発掘現場で普及しつつあるものだが、発掘された「遺構」にとどまらず、工場建物全体の三次元計測を試みた点は新たな試みである。

1. 「西の窯、および呂号焼成窯」跡地の発掘調査

五条坂京焼登り窯（旧藤平）は、もともと、東西2基の登り窯が縦に並んでいたという。

しかし、戦時中に「西の窯」を壊して「呂号焼成窯」（石炭窯）を築造した。「呂号陶器」（ロケット燃料精製装置）は、ロケット戦闘機「秋水」の燃料を精製する装置であり、耐酸の理化学容器が使用された。

（1）1・2トレンチの拡張

2016年に設定したトレンチを拡張し、「西の窯」8の間とそれを壊して作られた「呂号焼成窯」（石炭窯）の関係について検討した。その結果、「呂号焼成窯」



図1 1・2トレンチの発掘作業風景

の後裔と想定される石炭窯の基底部を検出したが、その下層に石炭を含む物原層を確認した。「呂号焼成窯」は戦後のある段階に撤去されて整地しなおし、新たに角窯（石炭窯）が築造されたことがわかった。その後、トンネル状遺構を築造するために、角窯の中央部分が破壊された。このトンネル状窯は部分的な検出にとどまったが、未知の窯の煙道施設である可能性が高く、「東の窯」の煙突に接続していた可能性がある。

2016年の調査で「西の窯」の一部だと判断した遺構の一部は角窯を壊した上に築造していることも確認できた。こうした結果から、この地点では何度も窯が作り替えられていたことが明らかになった。作り替えられた窯は、おおむね、次のような順序だったと想定される。

「西の窯」→「呂号焼成窯」→角窯→未知の窯の煙道＋井戸状遺構

地下遺構との対応関係は明らかではないが、このような変遷は鉄製支柱と梁の度重なる追加によっても確認できた。

以上のことから、文献資料や聞き取り調査では知ることができなかった、多様で複雑な実態が明らかになった。

（2）6トレンチの調査

西の窯の胴木間を発掘すれば、その傾斜角度や規模を明らかにできると考えたが、その想定地点はトイレ



図2 6 トレンチの発掘作業風景



図3 9の間の7 トレンチの発掘作業風景

や電圧装置などのため、発掘することができない。しかし、その北側には僅かに空き地があり、胴木間周辺に繋がる作業空間を調査することができると考えた。また、西の窯が昭和19年に破脚されたため、掘り込みだったと想定される胴木間部分は埋められた可能性が高い。その埋め土には、当時の製品が含まれており、年代の指標になる可能性があると考えた。そのため、胴木間本体を検出することはできないが、重要な知見を得ることができると考え、胴木間の北側に当たる地点にトレンチを設定した。その結果、明治42年前後に大規模に整地され、その後も何度か盛土・整地されたことが明らかになった。周囲の地形改変が想像以上に大きく、明治末に1m以上の盛土がなされ、その後も何度かにわたって盛土がなされ、1m程度嵩上げされたことがわかった。周囲の地形改変が想像以上に大きく、明治末に1m以上の盛土がなされ、その後も何度かにわたって盛土がなされ、1m程度嵩上げされたことがわかった。明治末の登り窯築造以後、敷地内の大きな地形改変はなかったと想定していたが、戦後も含めて度重なる盛土が繰り返されていたことがわかった。

なお、2016年の調査に引き続き、本年度も盛土層から僅かに古代末から中世の遺物が出土した。周辺の

発掘調査で平安時代末から鎌倉時代の遺構・遺物が確認されており、本遺跡もその一部に含まれている可能性が高い。

2. 「東の窯」9の間の発掘調査

かつての「東の窯」は現在より傾斜が緩やかであり、途中で盛土をして傾斜を強めている。また、2016年の窯北側の調査では、窯幅を縮小しながら段階的に土を盛り上げていることを確認している。その実態をさらに詳細に確認するため、9の間の中央付近に小トレンチ（7トレンチ）を設置した。その結果、床面は若干嵩上げされていることを確認したが、その下層は盛土が70cm以上続くことを確認した。トレンチ底に太いピンボールを突き刺して盛土の厚さを確認したところ、トレンチ底から約35cmの深さで石、もしくは窯壁などに突き当たった。このことから、少なくとも、床面から1m以上は柔らかな盛り土であり、その下層も遺物で止まっただけで、盛土はさらに厚かった可能性がある。

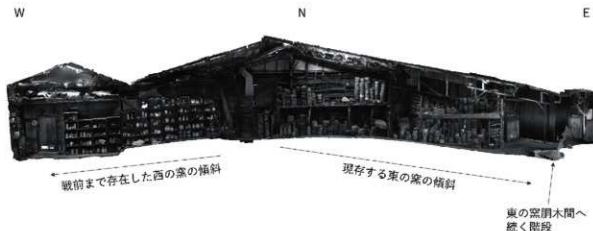


図4 五条坂京焼登り窯（旧藤平）工房北壁の三次元モデル

3. 工房と覆屋の三次元計測

すでに登り窯本体の三次元計測を行っていたため(2022年11月。早稲田大学と共同)、今回は登り窯周囲の工房や道具類の状況、覆屋の構造を記録した。計測に当っては、埼玉県立博物館のナワビ矢麻氏の指導を受けた。登り窯の三次元計測はこれまでも進めてきたが、工房全体は、初めての試みだった。

本工房は操業当時の状況を彷彿とさせる残りのよい状態であり、この雰囲気も含めて記録することを目的とした。死角が多く、完全な測量は困難であったが、現状を記録する新しい試みとなった。

また、1の間・2の間に保管されていた大量のゴウ(匣鉢)を移動し、窯内部の三次元計測を行った。2022年度に登り窯の外形を計測しており、それとの合成する予定である。その際に移動したゴウの計測も行った。

4. 遺跡をディスプレイする

旧藤平登り窯に学ぶ市民の会のメンバーの提案によって、調査では1の間・2の間の中に保管されていたゴウ(匣鉢)の半分以上を元に戻さず、1の間の半分を見学できるようにした。そして、残したゴウで登り窯南側広場に展示場を設置した。ゴウを使った展示台はその後、旧藤平陶芸登り窯見学会が2022年10月15日、(11月5日、12月3日)に開催された。また、五条坂ちゃんわん坂ネットワーク「わん碗 one 展」でも活用され、開晴小中学校の作品展(2022年11月5~7日)が行われた。2022年11月5・6日にはその一環として「登り窯にいける」と題した生け花展も開催され(協力:細川未来生流)、登り窯と工房全体が華やかに彩られた。発掘に参加した学生はその様変わりに



図5 ゴウ(匣鉢)を使用した「わん碗 one 展」

驚いていた。文化遺産を活用した事例として興味深い展示会だった。

おわりに

今回は、未だに感染対策に注意を払わなければならなかったとはいえ、久しぶりに大きな制限のない発掘調査を行なうことができた。

近現代産業遺産の発掘調査、室内の発掘調査、三次元計測は、通常の発掘調査とは異なっていたが、なによりも、コロナ禍から徐々に元に戻りつつある観光地の様子を横目に見ながら、暑い夏の日々を過ごした経験も、得難い経験だったと思う。今回の調査成果が、近い将来、本遺跡の活用計画に役立つよう、遺物の整理と研究を進めてゆきたい。

最後になったが、調査に全面的にご協力いただいた京都市教育委員会教育環境整備室、藤平陶芸、旧藤平陶芸登り窯に学ぶ市民の会の皆様に心より感謝申し上げます。

近畿・東海・南関東沿岸部における南海産貝類の分布調査

— 打ち上げ貝の破損形態別比率を中心として —

吉田有岐

要 旨

縄文時代の遺跡から出土するタカラガイ・イモガイ・オオツタノガイを素材とした貝製品の分布は、北は北海道から南は九州・沖縄まで、ほぼ全国に広がる。これら南海産貝類の調査は、南関東・伊豆諸島では行われてきたものの、近畿・東海地方では不明な点が多い。また、遺跡で出土する貝と海岸での打ち上げ貝との関係については先行研究が少なく、その研究の殆どが忍澤成視氏の研究である。本研究では、近畿・東海地方と関東地方の三浦半島・房総半島で打ち上げ貝の分布調査を実施した。調査は2022年10・11月で、調査地点は、和歌山県南部9地点、知多半島6地点、渥美半島9地点、志摩半島7地点、三浦半島7地点、房総半島9地点で、合計47地点である。その結果、オオツタノガイ以外のタカラガイ・イモガイを各種採集した。本稿では、各地点の採集調査の結果を報告する。特に、近畿・東海地方では考古学的関心から広域的に南海産貝類の分布を調査した事例としては初めてのものである。調査では、各種貝類の種ごとの個体数のほか、採集したタカラガイの破損形態の種類と数量比を算出した。現生タカラガイの破損形態の数量比を計測したのは初めての試みである。その結果、タカラガイの大型種については採集可能な個体が限られ、遺跡出土の貝製品も破損した貝を採集して加工した可能性があること、中型種・小型種については、完成品の入手が容易であることがわかった。

キーワード：南海産貝類、タカラガイ、イモガイ、オオツタノガイ

1. 南海産貝類の打ち上げ貝分布調査の目的

日本列島において、タカラガイ加工品について最初に触れたのは長谷部言人である（長谷部1942）。4例の大型タカラガイを紹介している。それから現在に至るまで、南海産貝類の現生貝と遺跡出土の貝製品との比較研究は殆どなされてこなかった。特に南海産貝類は、「南海」から運ばれたイメージにとらわれ、南西諸島から運ばれてくるものと考えられ、研究が進んでいなかった（忍澤2001）。遺跡と現生貝の関係を明確にしたのは忍澤成視氏である（忍澤2001）。

忍澤氏は、三浦半島、房総半島、伊豆諸島各島の現生貝調査を行った上で、各地の現生貝の分布傾向の比較、貝製品の素材供給地の推定を行った。その結果、①タカラガイ、イモガイ類の分布北限は房総半島で、ごく一部のタカラガイは青森県周辺まで確認できること、②伊豆諸島では、南房総や三浦半島の数倍の種が確認できること、③タカラガイ製品の生産遺跡の存在、④伊豆諸島からの貝の持ち込み、が明らかになった。「生産遺跡」の定義として、①未加工の原材料が存在すること、②加工途中の未製品が多数存在すること、③加工工具が存在すること、を条件としている（忍澤

2011）。②の加工途中の未製品とは、後述するbI類の破面が荒くなったような形態である。近辺の海岸から採集したと考えられているが、房総・三浦半島で未確認の種が、千葉県内の貝塚で発見されたり、伊豆諸島の特徴がよく発現しているキログダカラが発見されたりするなど、生息域から離れた周辺部での貝の流通についても忍澤氏は言及している。しかし、氏は各地の種構成と数および比率は把握しているが、縄文人が砂浜で採集したとされる南海産貝類の形状（破損形態）の数的比率や、破損した破片が遺跡出土の貝製品に利用された可能性については述べていない。また、関西地方の南海産貝類の分布地についても、触れられていない。本論文では、忍澤氏が過去に行った三浦半島、房総半島の調査に加えて、和歌山県南部地域、知多半島、渥美半島、三浦半島、房総半島で分布調査を行い、海岸で採集できる現生貝の形状（破損形態）と遺跡出土の貝製品との比較を行い、現生貝の形状（破損形態）が貝製品の素材となった可能性を考察する。

本研究の分布調査対象は、縄文時代の貝製品の素材として代表的なタカラガイ・イモガイ・オオツタノガイとする。これらを利用した垂飾や輪輪などの装飾

品は、出土状況や特殊な加工方法などからみて、呪術的な意味合いの強い護符などが想定されている（忍澤 2011）。これらは本州沿岸部でも多くの種類を採集することが可能である。

日本に産するタカラガイは、現在約 90 種とされている（ネイチャーウォッチング研究会 2009）。殻は丈夫な楕円形で、色とりどりの色彩を持ち、表面が艶やかなことから、愛好家も多い。腹面が左右で分かれ、殻口を作り、鋸歯状の歯を持つ事を最大の特徴とする（忍澤 2001）。タカラガイの多くは、満潮時の水位と干潮時の水位との間（潮間帯）の浅い海に生息している（ネイチャーウォッチング研究会 2009）。卵から孵化するとベリジャー幼生となり、海中を浮遊した後、岩の裏に定着し、成長する。多くは日本では越冬することができない。一部を除き、食用にされることはなく、縄文時代においても入手目的は食用以外にあったとみられる（忍澤 2001）。

イモガイは、日本では紀伊半島以南を中心に、164 種が知られている。様々な食性を持つイモガイが知られているが、特に魚類を食性とするものは毒性が強い。刺されると、運動失調、呼吸困難などで死に至る場合もある（忍澤 2004）。

オオツノハガイは、極めて限定された分布である。近縁種にツノハガイがあり、これは和歌山県南部地域でも産する。分布は奄美以南とされているが、不明な点が多い。

2. 各地域における現生貝の調査

南海産貝類の出土する都道府県は、全国でも局所的である。沖縄県では、遺跡から多くの南海産貝類が出土しているが、本州と異なり、先史時代においても様相が大きく違っていた可能性が高い（忍澤 2011）。今回の調査地域は、知多半島、渥美半島、志摩半島、和歌山県南部地域、三浦半島、房総半島の 6 地域である。調査は調査可能な砂浜で 1 地点 1 時間実施し、調査面積は一地点約 100 m 長以内で、砂を深く掘る採集は行わず、表面採集（深さ 2 cm まで）のみ実施する。気象や潮の条件は、統一できなかった。各地点の GPS 座標を文末の付表に記しておく。

（1）和歌山県南部

最初に紹介するのは、和歌山県南部である（図 1）。当地は、黒潮が流れ、温暖な気候であり、特に最南端に位置する潮岬付近のオゴグダ浜は日本でも有数な貝類採集地である。今回調査を行ったのは、2022 年 11



図 1 和歌山県南部地域調査地（国土地理院地図より陰影起伏図引用）

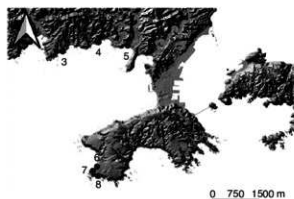


図 2 和歌山県南部地域調査地拡大図（国土地理院地図より陰影起伏図引用）

月 27 日で、9 地点各 1 時間の調査を行った（図 1・2）。調査当日は中潮、天気は晴れで、コンディションは良かった。結果的に 9 地点中、7 地点で採集することができた。地点 3 周辺から、徐々にタカラガイ、イモガイの貝種が増えていき、地点 7 で最も貝種、量共に豊富になる。その後、8、9 地点と東側海岸に進むにつれ、貝種、数共に激減する。和歌山県南部地域でも南に行けば行くほど、南海産貝類の数、種類が豊富になっていく傾向がある。多くの貝類が得られた地点は、南よりの地域で、磯と砂浜で形成され、砂浜には大規模な砂浜と貝だまりが形成されていた。殆ど貝類が得られなかった地点は、共通して北寄りであり、磯が小石で形成され、しかも磯が狭い等の特徴が見られた。以下は、各調査地点の調査結果である。

地点 1（和歌山県日高郡みなべ町山内）は、磯と砂浜が織りなす良好な海岸だが、タカラガイは 3 種類 3 個体しか得ることができなかった。採集できたタカラガイは、ホシキスタ 1 個体、ハナマルユキ 1 個体、不明タカラガイ幼貝 1 個体である。

地点 2（和歌山県西牟婁郡すさみ町周参見）は、小

石の広がる海岸部である。南海産貝類及び、通常の二枚貝も得ることはできなかった。

地点3(和歌山県東牟婁郡串本町有田)は、広大な磯が広がり、大規模な貝だまりはないが、所々貝類が落ちている。ここでは多くの南海産貝類を採集することができた。採集したタカラガイは、ヤクシマダカラ4個体、ホシキヌタ2個体、ホソヤクシマダカラ1個体、ハナマルユキダカラ25個体、クチムラサキダカラ2個体、コモングダカラ5個体、オミナエシダカラ6個体、ヤナギシボリダカラ4個体、キイロダカラ1個体、ハナビラダカラ2個体、アヤマメダカラ1個体、ナシジダカラ1個体である。

地点4(和歌山県東牟婁郡串本町高富)は、磯と砂浜で形成され、磯と砂で形成された貝だまりで南海産貝類を採集した。採集したタカラガイは、ヤクシマダカラ1個体、ハナマルユキダカラ5個体、メダカラ8個体である。

地点5(和歌山県東牟婁郡串本町二色)は、砂浜、小石、泥質の砂で形成され、所々海浜性植物が生えている。南海産貝類は、ほとんど得ることができなかった。

地点6(和歌山県東牟婁郡串本町潮岬「入陽のガバ」北側)は、磯と小石を中心とする砂浜で形成され、多くのタカラガイなどを採集できた。オゴグダ浜の北側に位置する場所である。採集したタカラガイは、ホシダカラ1個体、ヤクシマダカラ4個体、ハナマルユキダカラ7個体、オミナエシダカラ1個体、カモングダカラ1個体、コモングダカラ1個体である。採集したイモガイは、サヤガタイモ2個体、タガヤサンミナシ1個体、小型イモガイ不明種3個体である。

地点7(和歌山県東牟婁郡串本町潮岬「入陽のガバ」南側)は、磯と大規模な貝だまりで形成される海岸である。当地は、貝採集者に有名な地点で、よく見られる二枚貝から南海産貝類まで、多くの種類を見つけることが可能である。採集したタカラガイは、ホシダカラ1個体、ホシキヌタ3個体、ヤクシマダカラ46個体、ハナマルユキダカラ68個体、オミナエシダカラ2個体、コモングダカラ8個体、クチムラサキダカラ2個体、カモングダカラ7個体、カノコダカラ2個体、アヤマメダカラ5個体、ナシジダカラ12個体、メダカラ2個体、キイロダカラ3個体、ハナビラダカラ1個体、ヤナギシボリダカラ1個体、ウキダカラ1個体、アジロダカラ1個体、サメダカラ1個体、ウキダカラ1個体、アジロダカラ1個体、サメダカラ1個体、小型タカラガイ不明種4個体である。採集したイモガイは、タガヤサ

ンミナシ26個体、ガクフイモ1個体、キヌガイは、タガヤサンミナシ26個体、ガクフイモ1個体、キヌカツギモ4個体、サヤガタイモ1個体、マガキガイ3個体である。

地点8(和歌山県東牟婁郡串本町潮岬阿山)は、磯と砂浜で形成される。地点7近辺だが、南海産貝類はあまり採集できなかった。採集したタカラガイは、コモングダカラ1個体、ハナマルユキダカラ3個体である。

地点9(和歌山県東牟婁郡那智勝浦町浜ノ宮)は、白い砂浜で形成される。ごく少数の南海産貝類が得られた。採集したタカラガイは、メダカラ1個体である。

(2) 志摩半島

志摩半島は三重県中東部に位置し、伊勢湾、遠州灘、熊野灘に面している(図3)。外海側は、波が強いいため、海食崖等が見られる。2022年11月15日に7地点を調査し、4地点で南海産貝類を得ることができた。地点3から、貝種、数ともに採集できるようになり、大型種や中型種を含む様々なタカラガイを採集することができた。しかし、志摩半島の東側・南側のどちらが多いかは判断できなかった。各地点は複雑な地形で歩いて降りるのが難しく、降りることを試みたができなかった場所も多い。

東側は粒子の粗い白い砂浜が多く、南側は粒子の粗い色の濃い砂浜が多い傾向にあった。貝がほとんど採集できなかった地点2は、白い細かい砂浜と草原の海岸である。逆に、最も採集できた地点7は、小石、磯、色の濃い砂浜で形成される。志摩半島で南海産貝類が採集できない海岸の共通点は、波の影響が少ないためか植物が多く生えている。また、東側の海岸は、白い砂浜で形成されている場合が多い。三重県には南海産貝類が出土した遺跡がないため、縄文人が当地を採集

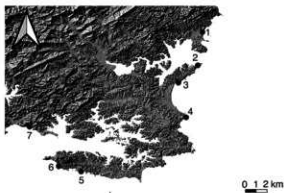


図3 志摩半島調査地(国土地理院地図より陰影起伏図引用)

地にしていたかどうかは、不明である。以下は、各調査地点と調査結果である。

地点1(三重県鳥羽市相差町 千島ヶ浜海水浴場)は、植物と白い砂浜で形成される。貝類は少なく、南海産貝類を採集する事が出来なかった。

地点2(三重県志摩市阿児町安乗714)は、白い砂浜と植物から形成される海岸である。貝類はほとんど落ちていなかった。

地点3(三重県志摩市阿児町国府 国府港)は、白い砂浜で、小石も多い。採集したタカラガイは、ホシキスタ2個体、シボリダカラ3個体、メダカラ8個体、チャイロキスタ3個体である。

地点4(三重県志摩市阿児町志島)は、色の濃い砂浜で、小石が多い。採集したタカラガイは、ヤクシマダカラ幼貝1個体、ハナマルユキ5個体、シボリダカラ1個体、メダカラ6個体、チャイロキスタ1個体、サメダカラ1個体である。

地点5(三重県志摩市志摩町越賀)は、砂浜で形成される。貝類が採集できるとは予想できなかったが、多くのタカラガイを採集した。採集したタカラガイは、ホシキスタ3個体、タルダカラ3個体、コモングカラ16個体、ハツユキダカラ1個体、カモンダカラ1個体、チャイロキスタ7個体、メダカラ11個体、不明タカラガイ破片1個体である。

地点6(三重県志摩市志摩町御座)は、色の濃い砂浜で形成される。貝殻はあまり採集できない。

地点7(三重県志摩市浜島町浜島 塩塚浜小公園)は、白い砂浜と色の濃い砂浜が入り交じる。多くのタカラガイと数個体のイモガイを得ることができた。採集したタカラガイは、ホシキスタ2個体、コモングカラ1個体、オミナエシダカラ17個体、ハナマルユキ6個体、サメダカラ1個体、メダカラ18個体、チャイロキスタ3個体、不明タカラガイ破片1個体、不明イモガイ破片3個体である。

(3) 知多半島

2022年10月18日に6地点を調査したが、どの地点でも南海産貝類を得ることはできなかった(図4)。二枚貝の漂着数は非常に多い。知多半島の南海産貝類が得られなかった理由として、内湾部に位置していることが考えられる。南海産貝類の幼生は、海流移動しているため、内湾には殆ど漂着しないと考えられる。知多半島周辺には冷水塊も存在しており、タカラガイ類が生息困難な原因の一つと考えられる。また、北部は護岸ブロックが多く、南北問わず、小石の堆積が目

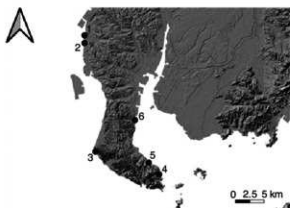


図4 知多半島調査地(国土地理院地図より陰影起伏図引用)

立つ。このことも砂浜に漂着する貝の数を減少させているのだろう。以下は、各調査地点の調査結果である。

地点1(愛知県常滑市 大野海岸)では、砂と小石で形成され、貝の数は少ない。

地点2(愛知県常滑市 西之口海岸)では、砂で形成され、貝の数は多い。しかし、南海産貝類は得られなかった。

地点3(愛知県知多郡美浜町小野浦岩成 野間埼灯台)は、小石で形成される海岸で、貝はほぼ落ちていなかった。

地点4(愛知県知多郡南知多町大井 大井漁港第一号防波堤灯台)は、小石で形成され、貝はほぼ見られなかった。

地点5(愛知県知多郡南知多町豊丘蔵野 山田海岸)は砂で形成され、二枚貝は非常に多く採集することができる。

地点6(愛知県知多郡美浜町布土郷下 郷下公園)は、砂で形成され、貝を拾うことができなかった。

(4) 渥美半島

2022年10月24日に9地点を調査し、4地点で南海産貝類を採集できた(図5)。北部は小石を中心とした海岸が広がり、南海産貝類はおろか貝類が採集出来ない環境が続く。地点9から徐々に南海産貝類が得られ、知多半島では得られなかったタカラガイやイモガイの採集が可能になる。内湾部から外洋に接する場所では、貝種も豊富になった。外洋に面している場所ほど貝類は得やすい。広い浜の磯や崖の残る縁辺部に貝だまりが形成されやすいこともわかった。しかし、採集できる点数は少ない。以下は、各調査地点の調査結果である。

地点1(愛知県田原市宇津江町東田 宇津江漁港)・地点2(愛知県田原市江比間町惣浦)・地点3(愛知県

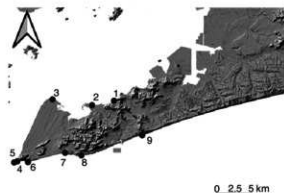


図5 渥美半島調査地(国土地理院地図より陰影起伏図引用)

田原市小中山町立馬崎)は、浜全体が小石で形成され、貝はほぼ採集できない。

地点4(愛知県田原市伊良湖町古山)は、礫と砂浜で形成され、礫を中心に貝だまりが形成されていた。採集したイモガイは、リシケイモ1個体、小型イモガイ不明種3個体である。

地点5(愛知県田原市伊良湖町志路浦 志路ヶ浜)は、小石、砂浜で形成される。南海産貝類は採集できない。

地点6(愛知県田原市日出町 日の石門)は、砂浜で形成されるが、貝だまりがある。南海産貝類も少ないながら見ることができる。採集したタカラガイは、ハナマルユキダカラ1個体である。採集したイモガイは、小形イモガイ不明種1個体である。

地点7(愛知県田原市和地町 一色機関銃陣地跡)は、砂浜で形成される。環境が良好ではないにも関わらず、少ないながらタカラガイを採集することができた。採集したタカラガイは、オミナエシダカラ1個体、メダカラ1個体である。

地点8(愛知県田原市和地町砂場)は、砂で形成され、貝はほぼ見られなかった。採集したタカラガイは、オミナエシダカラ1個体である。

地点9(愛知県田原市赤羽根町大石 太平洋ロングビーチ)は、砂浜で形成され、貝は見られなかった。

(5) 三浦半島

三浦半島は神奈川県南東部に位置する半島である(図6)。内湾部に位置するが、多くのイモガイ・タカラガイを採集できる地点として有名である。2022年11月23日に、7地点を1時間ずつ調査した。南海産貝類が採集できなかった地点1は粒子が細かい色の濃い砂浜で、最も多量に採集できた地点5は大量の貝だまりと色の濃い砂浜で形成されていた。地点1は河口が近く、汽水域となっていたためか、二枚貝が多い。

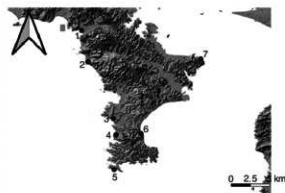


図6 三浦半島調査地(国土地理院地図より陰影起伏図引用)

三浦半島は、今回調査した6地域の中でも、海岸部の勾配が緩く、最も採集しやすかった。以下は、各調査地点の調査結果である。

地点1(神奈川県逗子市新宿1丁目 逗子海岸海水浴場)は、白い砂浜で形成される。近くに河口があるためか、南海産貝類は得られなかった。

地点2(神奈川県三浦郡葉山町下山口 葉山公園)は、砂浜で形成される。貝類のほとんどが破片である。採集したタカラガイは、中型不明タカラガイ1個体である。

地点3(神奈川県三浦市初声町和田 和田海水浴場)は、灰色の砂浜で形成される。小型タカラガイが多く採集できた。採集したタカラガイは、コモندگان1個体、オミナエシダカラ1個体、ナシジダカラ2個体、チャイロキヌタ11個体、メダカラ30個体である。

地点4(神奈川県三浦市初声町三戸 三戸海岸)は、色の濃い砂浜で形成される。大型種を多く採集することが出来た。採集したタカラガイは、オミナエシダカラ4個体、タルダカラ1個体、オミナエシダカラ12個体、ハナマルユキ1個体、ナシジダカラ7個体、大型タカラガイ不明種1個体、中型タカラガイ不明種6個体、カモンダカラ1個体、チャイロキヌタ13個体、メダカラ38個体である。採集したイモガイは、マガキガイ3個体、バラフイモ1個体である。

地点5(神奈川県三浦市三崎町城ヶ島)は、色の濃い砂浜で形成されるが、表面が貝に覆われるほどの貝だまりがある。小型種が多いが、多くの南海産貝類を得ることができる。採集したタカラガイは、ホシキヌタ1個体、大型タカラガイ不明種1個体、ハツユキダカラ1個体、ハナマルユキ6個体、中型タカラガイ不明種4個体、カモンダカラ2個体、アヤマメダカラ2個体、チャイロキヌタ16個体、メダカラ115個体、ナシジダカラ10個体、クロダカラ2個体、小型タカラガイ不明種7個体である。採集したイモガイは、マガ

ライモ 1 個体、大型イモガイ不明種 1 個体、バラフイモ 1 個体である。

地点 6 (神奈川県三浦市南下浦町菊名) は、色の濃い粒子の細かい砂浜を主体とする。採集したタカラガイは、メダカラ 3 個体、チャイロキスタ 4 個体である。

地点 7 (神奈川県横浜市中区磯子 4 丁目 観音崎海水浴場) は、磯と砂浜から形成される海岸である。環境は良好なはずだが、メダカラしか得られなかった。東側沿岸部に位置しているためかと考えられる。採集したタカラガイはメダカラ 5 個体である。

(6) 千葉県房総半島での調査結果

房総半島は、関東地方南東に突出する半島である(図 7)。周辺には多くの貝塚が存在する。2022 年 11 月 21 日に 9 地点各 1 時間の調査を実施し、7 地点で貝を採集する事が出来た。地点 1 は、河口近くに位置しており、色の濃い砂浜と草むらが入り交じり、大きな礫が混在していた。草むらがあり、大きな礫が混在する環境は、共通して貝が得られない。逆に、多く採集できた地点 3 は、磯と砂浜で形成される海岸であった。地点 2 から南下していくにつれ、採集できる貝の種類、量ともに増えていった。地点 2・3 では、種類のキムスメダカラを含め、多くのタカラガイを採集することができた。しかし、条件が整った良質な環境では、北よりの海岸でも多く採集することができた。半島東側では、急激に貝の種類と数が減り、南海産貝類は採集できなかった。以下は、各調査地点の調査結果である。

地点 1 (千葉県富津市萩生 144 津浜海水浴場) は、河川敷に近い環境で、色の濃い砂浜と草むらが入り交じる。貝類は少なく、南海産貝類は得られない。

地点 2 (千葉県南房総市久枝 岩井海岸) は、粒子の細かい色の濃い砂浜が広がる。貝類の漂着数は少ないが、南海産貝類が採集できる。採集したタカラガイ

は、ホシキスタ 1 個体、大型タカラガイ不明種 1 個体、オミナエシダカラ 12 個体、キムスメダカラ 1 個体、チャイロキスタ 10 個体、メダカラ 7 個体、ナシジダカラ 1 個体、小型タカラガイ不明種 2 個体である。

地点 3 (千葉県南房総市富浦町南無谷 1934-1) は、狭い砂浜に、小石と貝を中心とした貝だまりができていた。南海産貝類の比率は非常に高かった。採集したタカラガイは、ホシキスタ 6 個体、タルダカラ 1 個体、大型タカラガイ不明種 1 個体、オミナエシダカラ 36 個体、ハツユキダカラ 1 個体、中型タカラガイ不明種 7 個体、メダカラ 147 個体、サメダカラ 3 個体、チャイロキスタ 66 個体、ナシジダカラ 21 個体、アヤマダカラ 1 個体、キムスメダカラ 1 個体である。採集したイモガイは、大型イモガイ不明種 2 個体、マダライモ 1 個体、マガキガイ 4 個体、中型イモガイ不明種 2 個体である。

地点 4 (千葉県館山市見物 見物海岸) は、色の濃い砂浜で、漂着物の多い海岸である。採集したタカラガイは、オミナエシダカラ 1 個体、メダカラ 1 個体である。

地点 5 (千葉県館山市波左間地先 波左間海水浴場) は、色の濃い砂浜が広がる。最も色が濃い場所は立ち入り禁止で調査できなかった。採集したタカラガイは、オミナエシダカラ 5 個体、コモングダカラ 1 個体、メダカラ 5 個体、チャイロキスタ 3 個体、マガキガイ 1 個体である。

地点 6 (千葉県館山市坂田) は、砂と磯で形成される。採集したタカラガイは、ハナマルユキ 2 個体、メダカラ 2 個体である。採集したイモガイは、大型イモガイ不明種 2 個体である。

地点 7 (千葉県館山市布良) は、磯と砂浜で形成される。採集したタカラガイは、ホシキスタ 1 個体、オミナエシダカラ 5 個体、中型タカラガイ不明種 2 個体、メダカラ 7 個体、ナシジダカラ 1 個体、チャイロキスタ 5 個体、不明タカラガイ幼貝 1 個体である。採集したイモガイは、マガキガイ 1 個体、マダライモ 1 個体、中型イモガイ不明種 1 個体である。マダライモ 1 個体、中型イモガイ不明種 1 個体である。

地点 8 (千葉県鴨川市浜沢) は岩礁が主体である。数こそ少ないが、南海産貝類は得られた。採集したタカラガイは、ホシキスタ 2 個体、ハナマルユキ 5 個体、ハツユキダカラ 1 個体、メダカラ 10 個体である。

地点 9 (千葉県銚子市長崎町) は、粒子の少し粗めな砂浜で形成される。ごく少量の貝だまりはあるが、南海産貝類は得られなかった。

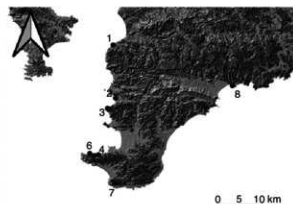


図 7 房総半島調査地(国土地理院より陰影起伏図引用)

3. 各地域の比較

今回の各地点1度のみの調査では、タカラガイ類は、和歌山県南部20種、志摩半島15種、三浦半島13種、房総半島12種が確認できた。イモガイ類は、和歌山

県南部7種（小型不明1種、大型不明1種、マガキガイ1種）、志摩半島1種（うち不明1種）、三浦半島3種（うち不明1種、マガキガイ1種）、房総半島4種（うち不明2種、マガキガイ1種）が確認できた（表1・2）。

表1 各地のタカラガイ種構成

* (大) (中) (小) は貝の大きさ。(ネイチャーウォッチング研究会 2009) に準拠。

種/地域	和歌山県	志摩半島	知多半島	渥美半島	三浦半島	房総半島
ヤクシマダカラ (大)	54	1	0	0	0	0
ホシキタ (大)	6	7	0	0	1	10
ホシダカラ (大)	2	0	0	0	0	0
ホソヤクシマダカラ (大)	1	0	0	0	0	0
ハナマルユキ (中)	101	11	0	1	7	7
コモンドカラ (中)	14	17	0	0	1	1
オミナエシダカラ (中)	9	17	0	2	17	59
タルダカラ (中)	0	3	0	0	1	1
ハツユキダカラ (中)	0	1	0	0	1	2
ナシジダカラ (小)	13	0	0	0	19	23
メダカラ (小)	6	37	0	1	19	181
クナムラサキダカラ (小)	6	0	0	0	0	0
アヤマダカラ (小)	6	0	0	0	0	0
アヤマダカラ (小)	5	0	0	0	2	1
ヤナギシボリダカラ (小)	5	0	0	0	0	0
カモンドカラ (小)	4	1	0	0	3	0
キイロダカラ (小)	4	0	0	0	0	0
ハナビラダカラ (小)	3	0	0	0	0	0
カノコダカラ (小)	2	0	0	0	0	0
サメダカラ (小)	1	4	0	0	0	3
ウキダカラ (小)	1	0	0	0	0	0
アジロダカラ (小)	1	0	0	0	0	0
チャイロキヌタ (小)	0	14	0	0	34	84
シボリダカラ (小)	0	3	0	0	0	0
クロダカラ (小)	0	0	0	0	2	0
キムスメダカラ (小)	0	0	0	0	0	2

表2 各地のイモガイ類の種と数

種/地域	和歌山県	志摩半島	知多半島	渥美半島	三浦半島	房総半島
サヤガタイモ	3	0	0	0	0	0
ガクフイモ	1	0	0	0	0	0
キヌカツギイモ	0	0	0	0	0	0
マダライモ	0	0	0	0	1	1
バラフイモ	0	0	0	0	1	0
リシケイモ	0	0	0	1	0	0
タガヤサンミナシ	27	0	0	0	0	0
不明	0	3	0	0	0	0
小型イモガイ不明種	6	0	0	4	0	0
中型イモガイ不明種	0	0	0	0	0	2
大型イモガイ不明種	0	0	0	0	1	4
マガキガイ	3	0	0	0	3	4

志摩半島・三浦半島・房総半島は、低温に強いチャイロキヌタ、メダカラ、オミナエシダカラが非常に多い。また低温種の割合が東にいくにつれ、多くなっている。しかし、和歌山県南部は中型種が中心となり、ハナマルユキ、ヤクシマダカラが多い。ハナマルユキは広海域種、ヤクシマダカラは低温に弱い種である。和歌山県南部地域は、今回調査した6地域の中で最も温暖な海流の流れ込む地域である。他地域では見られないイモガイ類も種類、量ともに多く得ることができた。6地域の中では和歌山県南部が南海産貝類を最も豊富に採集することができ、関西地方で南海産貝類製品が多く製作されたならば、素材供給地になっていたはずである。

しかし、関西地方周辺では、南海産貝類は遺跡から殆ど出土していない。比較的多くの貝塚が存在する愛知県南部地域に焦点を当てると、イモガイ製品が水神貝塚から出土している（豊橋市教育委員会1998）。水神貝塚で出土したイモガイ製品はタイミョウイモガイで、南海産のものとされている（豊橋市教育委員会1998）。今回の愛知県・三重県・和歌山県域での調査では、タイミョウイモガイは採集することはできなかった。ただし、和歌山県東牟婁郡磯崎で、在野の貝愛好家の楓達也氏が採集していたことが判明した。楓氏は、数十年間、和歌山県で貝の採集を行っているが、タイミョウイモガイを3個体採集できたということである。縄文時代においても、和歌山県南部地域で採集が不可能であるわけではなかっただろう。

タカラガイは最も多く採集できたが、関西地方での縄文遺跡での出土例は確認できていない。オオツタノハ製貝輪は愛知県の貝塚での出土例があるが（忍澤2011：290-291頁の表1）、今回の調査では採集することができなかった。

4. タカラガイの破損率

採集したタカラガイをサイズ別に分類し（表1）、その破損率を形態別に算出した（表3・4）。タカラガイの部分名称図を図8に示す。破損形態の分類は忍澤氏のタカラガイ加工製品の分類（忍澤2011：189頁）をもとに、次のように、一部改変した。aは背面に当たった部分を除去し、裏側を残すもの、b1は背面除去後に裏側を二分割したものの外唇部、b2は同じく背面除去後の内唇部、cは本体部未加工で背面腹面の一部に穿孔のあるもの、dは背面部破片、eは未加工、fはその他の破片、である（図9）。海岸で採集可能な現生貝も、人工的な加工ではなく、自然の破損による同様の形態が存在するので、この形態分類を利用した。

採集したタカラガイの破損率は各地域で大きく変わらない。どの地域も大型種ほど破損率が高く、小型種ほど破損率が低い。大型種ほど波の影響を受けやすく、また破片になっても大きいので採集率が高くなるからだろう。

大型種の現生貝は、和歌山県南部地域が最も採集量が多い。この地域での現生貝の破損率は、b1、f、b2の順に高い。fは、様々な形のものが含まれているため、結果的に破損率が高くなる。したがって、採集貝はもともと、b1、b2の比率が高いと解釈できる。そのほかの破損率は似たような低い数値となっている。遺跡出土の大型タカラガイもb1、b2の出土品が多い（忍澤2011）。タカラガイ大型種は、本来、このような形で採集されていた可能性が高い。加曾利貝塚のホシキヌタ製のb1は、水磨石のようなものがあり、殆ど加工せずに貝製品として用いられている（千葉市教育委員会2017）。

中型種は、大型種とは反対に、和歌山県南部地域では破損していないeが最も多く、以下、a、b1、b2、cの順となる。遺跡出土貝製品の破損率は、b1、b2、

表3 和歌山県南部採集タカラガイの破損形態別比率

大きさ／破損形態	a(背面無)	b1	b2	c	d	e(完形)	f(破片)	合計
タカラガイ(大)	2(3.2)	19(30.8)	14(22.6)	2(3.2)	4(6.5)	5(8.1)	16(25.8)	70(100)
タカラガイ(中)	31(24.2)	20(15.6)	14(10.9)	14(10.9)	1(0.8)	48(37.5)	0(0)	128(100)
タカラガイ(小)	4(7.3)	2(3.6)	0(0)	7(12.7)	0(0)	38(69.1)	4(7.3)	55(100)

表4 房総半島採集タカラガイの破損形態別比率

大きさ／破損形態	a(背面無)	b1	b2	c	d	e(完形)	f(破片)	合計
タカラガイ(大)	5(55.6)	2(22.2)	0(0)	0(0)	1(11.1)	1(11.1)	0(0)	9(100)
タカラガイ(中)	15(24.6)	9(14.8)	3(4.9)	7(11.5)	0(0)	36(59.0)	1(1.6)	71(100)
タカラガイ(小)	3(1.1)	2(0.7)	0(0)	6(2.1)	0(0)	271(95.1)	3(0.1)	285(100)

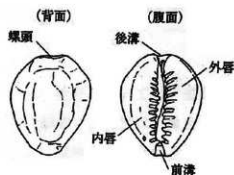


図8 タカラガイの部位名称(忍澤2011)

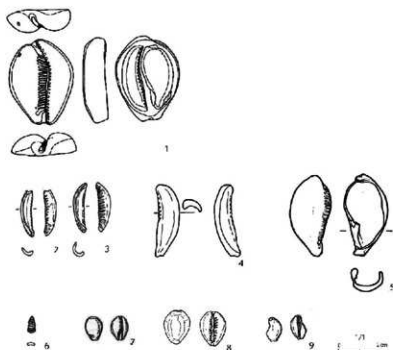


図9 遺跡出土タカラガイ製品

1. 丁貝・西広貝類(ホシキメタ a)
2. 千鳥・西広貝類(小型不明種 b1)
3. 千鳥・西広貝類(小型不明種 b1)
4. 千鳥・丸管利貝類(ホシキメタ b1)
5. 千鳥・江寄利貝類(大型不明種 b2)
6. 丁貝・西広貝類(小型不明種 c)
7. 千鳥・西広貝類(小型不明種 c)
8. 丁貝・西広貝類(小型不明種 e)
9. 千鳥・西広貝類(小型不明種 c)

図9 タカラガイの破損形態

fの順になる。

小型種は採集した現生貝も遺跡出土のものも最も破損率が低い。遺跡出土品が多かった b2 も、現生貝ではほとんど採集できなかったのも、縄文人が意図的にこの形に加工している可能性が高い。

タカラガイの貝製品の作成方法については忍澤氏が次のように述べている(忍澤2011:p265)。「(1) 前溝部を下に、後溝部を上にした状態で螺頂部に敲石等で打撃を加える。やがて小孔があき、さらに敲き続けると、タカラガイの殻は内唇部と外唇部に分割される。(2)

外唇部に余計な背面部が残った場合はこれを折り取り、内唇部はそのまま放棄。(3) 外唇部切断面を研磨して完成。」

海岸で拾うことが可能な未加工の貝や生貝に関しては、この作成方法で作られたと考えられる。タカラガイ小型種と中型種の多くがこれに該当するだろう。しかし、砂浜で採集出来る多くの個体が破損してしまっているタカラガイ大型種に関しては、破損したものをそのまま利用したか、もしくは、破損したものを採集し、これに研磨を加えた可能性がある。

また、背面が綺麗なタカラガイの割合は非常に低く、殆どが背面は劣化している。背面の綺麗なタカラガイは未加工品として使用し、状態の悪いものを敲打し、加工品とした可能性もある。ただし、遺跡出土の貝製品は地中で劣化が進んでいるため、当時のタカラガイの状態は、判断が不可能である。

今回の分布調査は、忍澤氏がすでに実施している三浦半島、房総半島の調査と、未調査の和歌山県南部地域、知多半島、渥美半島、志摩半島の調査を行った。一度の調査では、種、量ともに十分な数を得ることができず、長期間、同一地点の調査を継続する必要がある。イモガイや稀少種のオオツツノハは、ほとんど採集できなかった。ただし、破損率については、現生貝の破損率について、新たな知見を提供できた。

謝辞

本論は2022年度提出の卒業論文を改編したものである。卒論作成および今回の改編にあたって、指導教

員の矢野健一教授に多大な指導を受けた。記して感謝いたします。

参考文献

- 市原市教育委員会・財団法人市原市文化財センター
2005『市原市西広貝塚Ⅱ』（財団法人市原市文化財センター調査報告書第93集 上総国分寺台遺跡調査報告14）財団法人市原市文化財センター
- 忍澤成視2001『縄文時代におけるタカラガイ加工品の素材同定のための基礎的研究—いわゆる南海産貝類の流通経路解明に向けて—』『古代』第109号 pp1-7
- 忍澤成視2004『縄文時代のイモガイ製装身具—現生貝調査からみた素材供給地と入手方法』『動物考古学』第21号 pp35-39
- 忍澤成視2011『貝の考古学』同成社
- 金子浩昌・和田哲1958『館山鉾切洞窟の考古学的調査』『早稲田大学考古学研究室報告 第6冊』
- 千葉市教育委員会2017『史跡 加曽利貝塚総括報告書（第2分冊）』
- 東京都荒川区教育委員会1990『日暮里延命院貝塚』
- 豊橋市教育委員会1998『水神貝塚（第2貝塚） 牟呂土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書—水神地区—』
- ネイチャーウォッチング研究会2009『タカラガイ 生きている海の宝石 207種』誠文堂新光社
- 長谷部言人1942『石器時代のタカラガイと加工』『人類学誌』57-9 pp26-29

付表 調査地点のGPS座標

	地点 (所在地)	北緯	東経
和歌山県南部 (図 1・2)	地点 1 (日高郡みなべ町山内)	33.7679332	135.3033649
	地点 2 (西牟婁郡さき町周参見)	33.5503757	135.4802150
	地点 3 (東牟婁郡串本町有田)	33.4787577	135.7414324
	地点 4 (東牟婁郡串本町高富)	33.4842009	135.7564484
	地点 5 (東牟婁郡串本町二色)	33.4821269	135.7658310
	地点 6 (東牟婁郡串本町潮岬 「入陽のガバ」 北側)	33.4393190	135.7550910
	地点 7 (東牟婁郡串本町潮岬 「入陽のガバ」 南側)	33.4388360	135.7542830
	地点 8 (東牟婁郡串本町潮岬 潮岬四阿山)	33.4370655	135.7564074
	地点 9 (東牟婁郡智勝浦町浜ノ宮)	33.6382424	135.9367866
志摩半島 (図 3)	地点 1 (三重県鳥羽市相沢町 千島ヶ浜海水浴場)	34.3936859	136.9093102
	地点 2 (三重県志摩市阿児町安乗714)	34.3632563	136.9039557
	地点 3 (三重県志摩市阿児町国府 国府港)	34.3461240	136.8847940
	地点 4 (三重県志摩市阿児町志島)	34.3024819	136.8867828
	地点 5 (三重県志摩市志摩町越賀)	34.2602215	136.7839995
	地点 6 (三重県志摩市志摩町御座)	34.2604337	136.7698687
	地点 7 (三重県志摩市浜島町浜島 塩蔵浜小公園)	34.3025151	136.7353195
知多半島 (図 4)	地点 1 (愛知県常滑市 大野海岸)	34.9383427	136.8249502
	地点 2 (愛知県常滑市 西之口海岸)	34.9268612	136.8244443
	地点 3 (愛知県知多郡美浜町小野浦岩成 野間堤灯台)	34.7574713	136.8447442
	地点 4 (愛知県知多郡南知多町大井 大井港第一号防波堤灯台)	34.7230435	136.9673762
	地点 5 (愛知県知多郡南知多町豊岡霞野 山田海岸)	34.7419897	136.9467396
	地点 6 (愛知県知多郡美浜町豊丘郷下 郷下公園)	34.8066975	136.9208229
濃美半島 (図 5)	地点 1 (愛知県田原市宇津江町東田 宇津江漁港)	34.6605317	137.1769455
	地点 2 (愛知県田原市江比間町惣浦)	34.6543670	137.1417778
	地点 3 (愛知県田原市小中山町立馬崎)	34.6623579	137.0774540
	地点 4 (愛知県田原市伊良湖町古山)	34.5792034	137.0384531
	地点 5 (愛知県田原市伊良湖町恋路浦 恋路ヶ浜)	34.5806538	137.0218832
	地点 6 (愛知県田原市日出町 日出の石門)	34.5792034	137.0384531
	地点 7 (愛知県田原市和地町 一色機関銃跡地跡)	34.6622343	137.0777323
	地点 8 (愛知県田原市和地町砂場)	34.5891219	137.1243927
	地点 9 (愛知県田原市赤羽根町大石 太平洋ロングビーチ)	34.6135637	137.2209528
三浦半島 (図 6)	地点 1 (神奈川県逗子市新宿1丁目 逗子海岸海水浴場)	35.2885267	139.5742742
	地点 2 (神奈川県三浦郡葉山町下山口 葉山公園)	35.2569495	139.5791546
	地点 3 (神奈川県三浦市初声町和田 和田海水浴場)	35.1907740	139.6161012
	地点 4 (神奈川県三浦市初声町三戸 三戸海岸)	35.1730314	139.6204858
	地点 5 (神奈川県三浦市三崎町城ヶ島)	35.1339394	139.6128463
	地点 6 (神奈川県三浦市南下浦町菊名)	35.1777988	139.6548815
	地点 7 (神奈川県横須賀市鶴居4丁目 観音崎海水浴場)	35.2583056	139.7410955
房総半島 (図 7)	地点 1 (千葉県富津市荻生144 津浜海水浴場)	35.2047172	139.8355152
	地点 2 (千葉県南房総市久枝 岩井海岸)	35.0941466	139.8408700
	地点 3 (千葉県南房総市富浦町南無谷1934-1)	35.0698426	139.8225104
	地点 4 (千葉県館山市見物 見物海岸)	34.9738585	139.7972894
	地点 5 (千葉県館山市波左間地先 羽佐間海水浴場)	34.9723847	139.7882542
	地点 6 (千葉県館山市坂田)	34.9752144	139.7758260
	地点 7 (千葉県館山市布良)	34.9090591	139.8298757
	地点 8 (千葉県鴨川市浜夜)	35.1198140	140.1418672
	地点 9 (千葉県銚子市長崎町)	35.6995128	140.8625219

研究論文

弥生時代の明石川流域集落遺跡における人口研究

木村友哉

要 旨

弥生時代は本稲農耕の開始によって安定した食糧供給が可能となったことで、人口が増加したと考えられている。では、実際に人口はどのように変化したのであろうか。先行研究では、住居址数、遺跡数、墓数、面積等様々な要因から検討することにより、より本来の人口変動に近い自然な値を算出しようと試み、縄文時代遺跡に関しては、比較的早い段階で小山氏によって全国的な人口研究が行われている。しかし、弥生時代の人口研究は限定的にしか行われておらず、縄文時代においても小山氏の研究以降、全国を対象とした人口推定は行われていない。そこで、本研究では播磨地域の弥生集落の人口変動について研究することで、同地域における人口変動とその要因について明らかにし、主要周辺地域における人口研究の足掛かりにすることを目的とする。今回対象とする遺跡は、公表されている中で住居址が見えられている 16 遺跡である。そして、集成した住居遺構は弥生土器編年に基づき分類を行った。なお、人口を算出するにあたって必要な各住居の居住人数は、住居遺構の面積の大小によって設定した。結果、前期から中期後葉にかけての人口増加、中期後葉から後期にかけての人口増加率減少を数値として確認した。この人口減少は洪水等の自然的要因だけでなく、畿内地域・瀬戸内地域との関係による要因が考えられる。

キーワード：弥生時代、明石川流域、人口

はじめに

人口の変動というのは、環境の変化や周辺地域の人々との交流などの影響を受けたり、反対に物流や文化などの社会構造自体に影響を与えたりしながら生じるものである。すなわち、人口推移の研究を行うことにより、研究対象となる地域とその周辺地域における特性を明らかにすることが可能となる。しかしながら、弥生時代における人口推定の研究に関しては、縄文時代の同研究と比較してみると明らかに遅れているというのが現状である。今回、畿内地域と瀬戸内地域に挟まれた重要な場所に位置する播磨地域、その中でも東播磨に位置する明石川流域の集落遺跡に絞り、人口がどのように変化していったのかを住居址数から推定する。そして算出した結果から、同地域の特性、そして主要周辺地域との関係性についても検討し、明確にすることを旨とする。

1. 先行研究

(1) 人口推定に関する先行研究

日本全域を対象とした人口推定は、縄文研究ではあるが 1970 年代から 80 年代という早い段階で、小山修三が行っている。この研究は他の研究者が人口研究を行うにあたって、現在でも引用される唯一のデータと

なっているほどの広範囲的な研究であった。小山氏は遺跡数・住居数に人口に比例するという考えを前提とし、発掘調査の地域による偏りを考慮しつつ、計算によって日本各地域、各時期の人口動態・動態を求めた(小山 1984)。

今村啓爾は、西関東と中部地方における縄文時代の人口増減を、まず住居址数を土器型式別に割り振り、放射線炭素年代を用いて、各型式の住居数を 100 年あたりの住居数に変換して動態を求めた。また、先述した小山氏の研究と比較し、彼の人口推定における問題点を指摘した(今村 1997)。

小澤佳恵は、玄界灘沿岸の弥生前期集落の動態を、居住域の面積を新たなデータとして追加することにより、より正確な人口増加率を算出しようと試みた(小澤 2000)。

矢野健一は、曲川遺跡の人口(世帯)を、土器棺墓の数を根拠に試算した。ただし、矢野氏本人が論文内でも述べている通り、この試算方法は 1 住居、遺跡の継続期間や 1 世帯当たりの子供の数などがあくまで見積りとなっている(矢野 2006)。

小林謙一は、床面積からそれぞれの住居に住むことが可能な最大の人数を計算し、そこから東京都目黒区大橋集落の構成員の数の推定を行った。その際に、延

べ床面積をそのまま用いて最大可能人数を算出するのではなく、家族構成や当時の縄文人の身長、また堅穴住居の構造等を考慮し、実際に何人が物理的に一つの家に横になり生活できるかを、根拠に基づいて考察した(小林 2008)。

若林邦彦は、近畿地方における弥生集落の居住区域分布パターンを分類し、その変遷を分析した。その結果、① A1 類：10 km 四方内に複合型集落が複数形成② A2 類：10 km 四方内に複合型集落が単数形成③ B 類：10 km 四方内に中小規模集落のみ分布(A 類のように B 類も集落形成のパターンで B1、B2 と分類することは可能だが、報告例が少ないため一つにしている)の、計 3 パターンに分類した。また、このパターンを全国規模に当てはめ、弥生中期後半から後期にかけての地域性と変遷、集落の社会構造の変化についても明瞭にした(若林 2009)。

松本武彦は、住居数と AMS 放射線炭素年代法を用いた計算を行い、吉備中南部における弥生時代集落における動態の変動を求めた。住居数の変動は人口の変動とも関連していることから、人口動態についても触れている(松本 2014)。

中村大は、東北北部の縄文遺跡を対象として、人口推定だけでなく、発掘された土坑および土器埋設遺構のデータから、土坑儀礼と人口現象の関係性について研究した。中村氏は動態(増減)だけでなく静態(実際の人数)の推定の重要性を説いた。また、住居址数、遺跡数の 2 要素から人口を算出することで、データの歪みを減らす手法をとった(中村 2018、2021)。

(2) 東播磨地域の弥生時代集落に関する先行研究

東播磨地域の弥生集落遺跡に関しては、まず丸山渥が明石川流域における遺跡群を整理し、位置関係や誕生・衰退の時期から、この地域の弥生時代における集落動態について言及した。また常本遺跡、玉津田中遺跡、新方遺跡、南別府遺跡、それとまだ未発見の遺跡(推測)をそれぞれ核となる集落とした大集落に分類できるのではないかと考察した。そして、以下の課題点を挙げた。

- ① 集落の開始時期
- ② IV 期における集落、特に高地性集落の急増(丸山氏はその原因に関して、水害ではなく「戦い」に関係しているのではないかと言及した。)
- ③ 大集落どうしの関連性

丸山氏が挙げた上記の課題点は、以後の同地域における集落研究において非常に重要な指針となる(丸山

1992)。

岸本道昭は、近畿西端かつ東部瀬戸内地域に位置する播磨地域の弥生時代における変遷に関して、集落や土器・石器、墓制の地域性に着目しながら論じた。特に、丸山氏が挙げた課題の一つである IV 期から V 期にかけての高地性集落衰退や、土器様式の変化、石器の激減に関しては、讃岐や吉備地方との交流や畿内勢力の進出等、他地域との交流の中で集落移動を余儀なくされた結果、高地性集落が散見されるようになり、後期になるとそれが姿を消し、加えて土器等の変化などが生じたのは播磨が畿内と一体化しつつあるからだと言及した(岸本 1999)。

前田佳久は、明石川流域を含む、神戸市域を中心とした大阪湾北岸地域の弥生集落遺跡について整理し、それらの弥生集落遺跡の展開についても言及した。前期前半段階では、河川沿いの低湿地で集落が成立し、規模は他の時代と比較して小さいものが多かったが、前期後半になるとその規模が拡大していった。沖積地内にあった玉津田中遺跡の居住区域が洪水の影響により消滅し、その後段丘上に移った例があるように、中期の中でも後半にあたる IV 期に入ると高地性集落が成立するが、V 期初頭段階で消滅する。同時に、中部瀬戸内地方の土器の影響がみられる。さらに、V 期前半から後半にかけて、主となる遺跡が移り変わるという現象が起こる。前田氏は、IV～V 期の拠点集落の移動と、瀬戸内の文化流入に因果関係がある可能性を指摘した(前田 2001)。

荒木幸治は、播磨、淡路、摂津における弥生時代中・後期遺跡に関して代表的なものを取り上げ整理し、各集落遺跡における「居住集団」(ここでは居住域と墓域を合わせた概念的な範囲の意)の変動を確認、そこからさらに集落遺跡間における差異についても問題提起を行った(荒木 2012)。

園原悠斗は、軍事的・防御機能を有すると考えられてきた高地性集落に関して、瀬戸内・畿内両地域の間に位置する明石川流域の低地と高地の集落の差異について、打製石鏃を参考資料として用い、本地域における高地性集落の特徴と、その形成過程について言及した(園原 2020)。内容は以下のとおりである。

- ① 特徴 同時期の低地、高地それぞれの遺跡から出土した石鏃の量に関しては大差ないことが明らかとなった。ただし、出土した石鏃の特徴に関しては差異があり、高地は大阪湾沿岸地域の影響、低地は瀬戸内海沿岸地域の影響を受けた石鏃であり、高地の石鏃は実際の大阪湾沿岸地域のものより小型であることが判明し

た。そのため、高地性集落の軍事的・防衛的な側面について石礫を根拠に用いることはできないため、畿内地域と交流を行っていた一般的な集落と考えることが妥当である。

②形成過程 先に拠点集落を中心とした瀬戸内海沿岸地域と交流関係にあった集落グループが明石川沿いの低地に居住していた。中期後半に入り、畿内地域からの影響を受けるようになる。結果として、畿内地域と交流を持った集団が低地の集落群を避け高地に拠点を置いた。

(3) その他、集落・播磨地域に関連する先行研究

小林謙一は、慶応義塾大学湘南藤沢キャンパス内に位置する縄文時代中期集落に関して、住居のライフサイクル¹⁾や同時存在・同時機能の考慮、土器細別時期決定等から、時期ごとに何件の住居が存在していたと推定し、集落の一時的復元に取り組んだ(小林 1999)。また、課題点として、①土器細別時期設定が一世代の時間幅より大きくなる傾向があること、②土器細別時期による区分とライフサイクルにズレが生じることの2点を挙げている。

篠宮正(2007)は、部分的にしか行われていなかった東播磨地域における弥生土器編年を、全体を通して初めて行った。器種は壺、甕、鉢、高坏、器台と他地域の土器である。時期区分は、弥生時代前期をⅠ期(3段階)、弥生時代中期をⅡ期(3段階)、Ⅲ期(2段階)、Ⅳ期(4段階)、弥生時代後期をⅤ期(5段階)、庄内式平行期を庄内式期(3段階)とし、6期20段階に区分している(篠宮 2007)。

富山直人は、播磨地域における古墳時代の集落に関して、渡来人の動向を軸として推察した。特に明石川流域の集落遺跡に関しては、古墳・集落の数と韓式系軟質土器など外来文化との関連が見られる遺物が多くみられるため、そこから生活習慣の変容や集落間格差、物流の動向などについて言及した(富山 2012)。

姜東錫は、地理情報システム(GIS)を使用して、韓国と日本の二地域における集落の空間考古学的なパターン構築に取り組んだ。加えて、韓日の集落パターンを比較することにより、それぞれの集落パターンの成立背景や展開の様相、構造などについての理解を深めた(姜 2020)。

2. 先行研究の到達点と課題点

(1) 到達点

人口に関する先行研究では、人口を推定する際に、

住居数、遺跡数、墓数、面積等様々な要因から検討することにより、より本来の人口変動に近い自然な値を算出しようと試みられている点が優れている。また、縄文時代遺跡に関しては、比較的早い段階で小山氏により、全国的な人口研究が行われていることも重要である。

播磨地域の弥生時代集落における先行研究に関しては、本地域を含む播磨地域(東播磨・西播磨)全体の土器編年が行われている点、弥生中期～後期にかけての本地域における人口変動の原因について考察がなされている。

(2) 課題点

縄文時代に関しては、先述した通り日本全域を対象とした研究が行われるなど、人口研究が比較的行われているが、それに対して弥生時代の人口研究は限定的にしか行われていない。ただし、縄文時代においても日本全域を対象とした研究は小山氏の40年以上前の研究が唯一であるという状態であることは大きな課題の一つであるといえる。また、弥生時代は縄文時代と比較し、各遺跡の規模が大きくなるため、広範囲にわたる研究の難易度が高いことも、弥生時代の人口研究における大きな障壁であるといえる。加えて、縄文時代に関しては年代を特定するうえで用いる参考資料が豊富に存在するが、弥生時代に関しては開始時期など年代に関する意見が研究者間でも対立しており、絶対年代を用いた人口研究が困難であるという現状がある。

(3) 研究の目的

畿内地域、瀬戸内地域という歴史的に重要な2地域に挟まれた播磨地域の弥生集落の人口変動について研究することで、同地域における人口変動とその要因について明らかにするだけでなく、この研究自体を主要周辺地域における人口研究の足掛かりにすることが目的である。

3. 分析の対象と方法

(1) 分析対象とその概要

明石川流域には複数の弥生時代集落遺跡が存在するが、今回対象とする遺跡は、公表されている中で住居址が発見されている以下の遺跡である(図1)。

吉田南遺跡 明石川下流域西岸、新方遺跡西側の微高地上に位置する集落遺跡であり、東西約500m、南北約900mに広がる。弥生時代後期～中世の遺構が検出されている。

新方遺跡 明石川と伊川の合流地点上流側に位置する沖積地にある集落遺跡である。東西約1,500 m、南北約1,000 mと広範囲にわたる集落遺跡であるため、調査地区ごとに状況が異なり、弥生～近世の遺構が検出されている。また、弥生前期の埋葬人骨が発見されていたり、玉類生産が推測される堅穴建物、遺物が検出されたりと、重要な意味を持つ遺跡となっている。

今池尻遺跡 新方遺跡の北東に位置する微高地上の集落遺跡である。新方遺跡などと比較するとそれほど規模は大きくはないが、弥生～中世までの遺構が検出されており、継続的に人が住んでいたことが想定される。

高津橋大塚遺跡 伊川下流右岸の沖積地と高位段丘上に位置している。南西側には新方遺跡や吉田南遺跡が立地している。弥生時代後期に新出した。

白水遺跡 伊川により形成された氾濫原上、伊川の西側に位置する遺跡である。南東200 mの位置には新方遺跡が立地しており、周辺の弥生時代集落との関係性を見るうえで重要な遺跡である。

今津遺跡 明石川左岸の沖積地に広がる弥生時代中期から古墳時代後期にかけての集落遺跡である。南側約1 kmあたりの場所には新方遺跡が位置しており、新方遺跡に付随する遺跡と考えられる。

南別府遺跡 伊川の中流域東岸の河岸段丘および自然堤防上に位置している遺跡である。縄文時代から中世鎌倉時代ごろまでの遺物が出土している。

上脇遺跡 伊川と永井谷川の合流地点やや上流、丘陵地のがけ下および伊川右岸の旧氾濫原に位置する遺跡である。弥生時代～近世までの遺跡が連続して発見されている。付近には表山遺跡等が存在する。

表山遺跡 伊川右岸の丘陵上、伊川中流域に位置する遺跡である。同地域における高地性集落が廃絶した弥生中期後半ごろに出現し、その後弥生後期初頭頃に廃絶したとみられている。

頭高山遺跡 伊川の中流域左岸に位置する遺跡であり、同川によって形成された平野部に臨む標高117 mを頂部とする洪積丘陵上に立地している。頭高山の頂部とそれに付随する尾根のほぼ全体に広大な集落跡が存在することが試掘調査により明らかとなり、調査が進められていった。

出合遺跡 明石川中流域西岸の沖積地および洪積段丘上、玉津田中遺跡の南側に位置している。旧石器時代～中世の遺跡ではあるが、弥生時代に関する遺構・遺物も発見されている。

玉津田中遺跡 明石川中流域左岸の完新世段丘面・氾濫原に位置する集落遺跡である。東西約800 m、南北

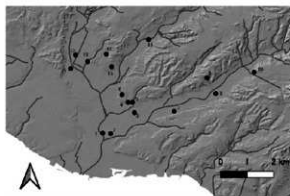


図1 対象遺跡分布図 (S=1/60000)

- 1 吉田南遺跡 2 新方遺跡 3 今池尻遺跡
4 高津橋大塚遺跡 5 白水遺跡 6 今津遺跡 7 南別府遺跡
8 上脇遺跡 9 表山遺跡 10 頭高山遺跡 11 出合遺跡
12 玉津田中遺跡 13 小山遺跡 14 居住・小山遺跡
15 日輪寺遺跡 16 城ヶ谷遺跡

約2,000 mと先述した新方遺跡よりも広く、縄文晩期～中世の遺構が検出されている。新方遺跡同様、継続的な人々の営みが読み取れる。時期の幅が広いこと、本遺跡一つの中でも、河川の氾濫による居住域の変化や、他地域の影響を受けた文化を見ることができることから、非常に重要な遺跡となっている。今回の対象遺跡の中ではこの玉津田中遺跡と先に記述した新方遺跡が、大規模拠点集落とされている。

小山遺跡 明石川と榎谷川の合流地点に位置し、明石川左岸の河岸段丘上に営まれた集落遺跡である。周囲には玉津田中遺跡がある。

居住・小山遺跡 平野部との比高が16 mほどの高位段丘に位置する遺跡である。玉津田中遺跡の西側に広がる遺跡であり、東西約300 m、南北約1,000 mとそこまで大きくはない。弥生時代から中世の遺跡である。

日輪寺遺跡 明石川と榎谷川の合流部北側、高位段丘面上に位置する遺跡である。周囲には、北側に居住・小山遺跡、南側には二ツ屋遺跡などが所在している。

城ヶ谷遺跡 榎谷川中流域左岸の丘陵上に位置する遺跡である。遺跡の範囲に関しては、標高約100 mの尾根頂部から丘陵斜面の総面積約60,000 m²に及ぶと推測されている。本地域における弥生時代中期の高地性集落の一つである。尚、明石川流域における弥生時代最初期の遺跡として学術的にも有名である吉田遺跡や中期の片山遺跡、大規模な高地性集落の一つである青谷遺跡などを含む、昭和55年頃以前に行われた発掘調査に関しては、発掘調査報告書等の資料が公開されていないことから、今回詳細な情報を収集することが不可能であった。ただし、吉田、片山両遺跡に関しては中世の枝吉城築城時に大規模な削平・整地が行われ

たこと²⁾により、遺構面はほとんど残されていないことが調査から明らかになっている。

(2) 方法

分析の手法としては、まず明石川流域における弥生集落遺跡の住居遺構を集成し、集成した住居遺構を、篠宮氏の東播磨地域における弥生土器編年に基づきⅠ期～Ⅴ期、庄内式平行期、古墳時代以降に分類する(篠宮 2007)。その際に各時期における時間幅を設定する必要があるが、今回は目安としてⅠ期は200年、Ⅱ～Ⅳ期は各100年、Ⅴ期は150年、そして庄内式期は100年間読いたものとする。また、人口を算出するにあたって必要な各住居の居住人数は、住居遺構の面積の大小によって設定する。設定した居住人数をもとに、人口の大小関係を算出する。尚、今回は人口の動態(増減)を中心に分析を進めていく。これは、前節ですでに言及したが、当該地域の弥生集落である吉田遺跡や片山遺跡などで中世枝吉城の時代に大規模な削平が行われ、住居址を含む当時の遺構が破壊されたことにより集落の規模が不明となり、静態(人口の絶対数)を出すことが現状困難なためである。そして人口推定のための、人口が同地域内で変動した原因、または人口が変動したことで発生した現象等を、遺物や地理的条件、他地域との交流など様々な観点から検討を行う。

4. 分析

(1) 住居址の時期ごとの分類

第一に、各期における住居址数を存在確率から分類する。ここでいう「存在確率」というのは、「ある時期に特定の住居が存在していた確率」のことである。よって、例えば出土土器から住居遺構がⅡ～Ⅳ期の複数の範囲内で使用されていたことが判明した場合、それぞれの時期で均等に約33%の確率で存在すると仮定し、表には「0.33」と記入する。その結果、表1のようになった。勿論、Ⅳ期とⅤ期に使用期間がまたがっていた場合、100年間と設定したⅣ期と150年間と設定したⅤ期では、同程度の確率で遺構が存在していたと考えるには無理があるかもしれない。ただし、今回はあくまで人口を推定することが目的であるため、調整に関しては人口推定の際に行うものとする。

まず前期(Ⅰ期)であるが、住居遺構が確認できたのは、新方遺跡、出合遺跡、玉津田中遺跡の3遺跡である。他の時期における住居址数と比較すると、非常に数が少ない結果となった。これは、吉田遺跡のように数百年前に遺構自体が破壊されてしまっていること

なども原因として考えられるが、後述するⅡ期～Ⅳ期の伸び率からも、相対的に遺構数は中期より少なかったのではないかと考えられる。

中期に関しては、居住・小山遺跡、今津遺跡、表山遺跡、城ヶ谷遺跡、新方遺跡、頭高山遺跡、玉津田中遺跡、出合遺跡、南別府遺跡の計9遺跡で住居遺構を確認した。前期と比べて居住域が拡大し、また、Ⅱ期からⅣ期に時代が進むにつれて遺構数も増加していくことが分かるが、その中でも特筆すべきは城ヶ谷遺跡と頭高山遺跡である。両遺跡は本地域の北東部に位置する高地性集落である。Ⅳ期に入り突然出現し、頭高山遺跡はⅣ期のうちに、城ヶ谷遺跡もⅤ期で住居遺構が見られなくなったことが確認できた。

後期に入ると、前・中期から続く集落のほか、吉田南遺跡や日輪寺遺跡など、新たな集落が再び西部、明石川河岸周辺の沖積地に出現したことが住居遺構から分かる。また、全体の遺構数もⅣ期の89.29から154.8まで急激に上昇している。ただし、これは単純に人口が増加したからというわけではなく、各期の時間幅の差によるもの大きいと考える。この時間幅の差に関しては、後述する人口推定の分析の際に深く言及する。

庄内式期に入ると、本地域における遺構の数が大幅に減少することが確認できた。例えば、後期に入り出現した日輪寺遺跡に関しては、発見された遺構数が41.82であったのに対し、庄内式期になると5.82にまで減少している。対象遺跡全体でみても、後期では154.8あったのに対し、庄内式期では19.3にまで大きく減少していることが見て取れる。

(2) 人口推定

人口を算出するうえで必要となる一住居当たりの居住人数であるが、今回はより正確な値に近づけるために、遺構の面積によって遺構ごとに設定した。まず、対象とする遺構を10m²ごとにまとめたものが表2である³⁾。ここで、面積不明の遺構以外における住居遺構の平均面積の値を概算すると約31m²となった。これを本地域における標準的な堅穴住居の大きさとし、20～40m²の居住人数を4人と設定する。以後、40～60m²を5人、60～80m²を6人、80～100m²を7人とする。また、10～20m²の遺構に関しては3人と設定し、10m²未満の遺構に関しては4人と設定する。これは、10m²未満の遺構には未発掘部分がある、または削平されており完形でない場合が多いことが理由である。面積が不明な遺構に関しても同様に4人と

表1 明石川流域の弥生集落における住居遺構の時期別分類表²⁾

遺跡名	前期 (Ⅰ期)	中期 (Ⅱ期)	中期 (Ⅲ期)	中期 (Ⅳ期)	後期 (Ⅴ期)	庄内 併行期	(古墳 初頭)	その他 (時期区分 が不明な 遺構)	計(基)
居住・小山遺跡		0.33	0.83	0.83					2
今池尻遺跡					1				1
今津遺跡		1.98	4.48	2.48	1			1	11
表山遺跡		2	2	2	2				8
上脇遺跡					3			1	4
高津橋大塚遺跡					1.98	1.98	1.98	2	8
小山遺跡					7				7
城ヶ谷遺跡				16.5	42.5			2	61
白水遺跡					1				1
新方遺跡	2	3.66	5.66	7.66	2.66	1.66	0.66		24
頭高山遺跡				32					32
玉津田中遺跡	7	15.99	37.49	27.49	29.63	8.63	3.63		130
出合遺跡	1.5	1.5			4.66	0.66	0.66		9
日輪寺遺跡					41.82	5.82	1.32	2	51
南別府遺跡		0.33	0.33	0.33	0.55	0.55			2
吉田南遺跡					16				16
計	10.5	25.79	50.79	89.29	154.8	19.3	8.25	8	367

表2 住居遺構の面積による分類表

面積(m ²)	～10	10～20	20～30	30～40	40～50	50～60	60～70	70～80	80～90	90～100	100～	不明	計
数(戸)	31	74	73	64	31	23	10	14	2	2	1	42	367

設定する。この居住人数を住居遺構数と掛け合わせたデータが表3である。

ここで、前節でも少し言及した時間幅について考慮する。例えば、全体におけるⅤ期の人口は632.43となっており、直前のⅣ期は371.06であることから約1.7倍にまで人口が増加しているように見える。しかし、3章2節で触れたように、Ⅳ期とⅤ期はその時間幅が異なるため、見かけ上の値と実際の値は異なる。そこで、時間幅を100年に統一すると表4のようになる。この値を用いて分析を進めていくこととする。

まずⅠ期であるが、先述した通り後世で削平されてしまっている遺構が多いため、実際に当時あった住居址数の割合よりは少ない値になっていると考えられる。ただし、後述する中期の人口の伸び方から、Ⅱ期よりも少ない値となっていることは正しいのではないかと考えられる。

次に中期であるが、Ⅱ期からⅢ期にかけての増加数とⅢ期からⅣ期にかけての人口増加率がほぼ一定で、比例関数的に増加していったことが分かる。特にⅢ期からⅣ期にかけての人口推移は、前節でも述べたよう

に頭高山遺跡をはじめとする高地性集落が出現し、居住域の変化を伴ったものとなっていることが重要な点である。

後期Ⅴ期については、人口数自体は他の期と比較しても非常に多い値となっているが、時間幅をそろえて比較した場合、Ⅳ期から増加はしているが、その増加率は半分以下に減少しているという結果となった。庄内式期に関しては、Ⅴ期からさらに数を減らしている。これに関しては、極端な減少であることから、庄内時期における遺構のサンプル数の低さが原因として考えられる。但し、Ⅳ期からⅤ期にかけての人口変動数を踏まえると、Ⅳ期からⅤ期・庄内式期にかけて何らかの要因が働いた結果、人口減少につながったのではないかと考えられる。詳細については5章で考察することとする。

(3) 集落の変遷に関する分析

明石川流域の弥生集落の変遷に関しては、1章2節で記述した通り、丸山氏や園原氏らがすでに研究を行っている。今回、私は人口推定の結果から集落の変

表 3 明石川流域の弥生集落における時期別人口データ表 (総数)³⁾

道跡名	前期 (Ⅰ期)	中期 (Ⅱ期)	中期 (Ⅲ期)	中期 (Ⅳ期)	後期 (Ⅴ期)	庄内 併行期	(古墳 初頭)	その他 (時期区分 が不明な 遺構)	計 (人)
居住・小山道跡		1.32	3.32	3.32					7.96
今池尻道跡					6				6
今津道跡		9.57	19.57	11.57	4				44.71
表山道跡		7.75	7.75	7.75	7.75				31
上脇道跡					11			4	15
高津橋大塚道跡					6.6	6.6	6.6	16	35.8
小山道跡					34				34
城ヶ谷道跡				63.5	150.5			14	228
白水道跡					6				6
新方道跡	7	15.97	25.47	34.47	8.64	7.64	2.64		101.83
頭高山道跡				130					130
玉津田中道跡	29	67.63	154.13	119.13	127.18	38.18	15.18		550.43
出合道跡	5.5	5.5			18.31	2.31	2.31		33.93
日輪寺道跡					187.95	55.95	4.95	11	52
南別府道跡		1.32	1.32	1.32	2.5	2.5			8.96
吉田南道跡					62				62
計	41.5	109.06	211.56	371.06	632.43	113.18	31.68	45	1347.62

表 4 明石川流域の弥生集落における時期別人口データ表 (時間幅一定: 100 年)

道跡名	前期 (Ⅰ期)	中期 (Ⅱ期)	中期 (Ⅲ期)	中期 (Ⅳ期)	後期 (Ⅴ期)	庄内 併行期	計 (人)
居住・小山道跡		0.66	1.66	1.66			7.96
今池尻道跡					1.5		6
今津道跡		4.785	9.785	5.785	1		21.355
表山道跡		3.875	3.875	3.875	1.9375		13.5625
上脇道跡					2.75		2.75
高津橋大塚道跡					1.65	6.6	8.25
小山道跡					8.5		8.5
城ヶ谷道跡				31.75	37.625		69.375
白水道跡					1.5		1.5
新方道跡	1.75	7.985	12.735	17.235	2.16	7.64	49.505
頭高山道跡				65			65
玉津田中道跡	7.25	33.815	77.065	59.565	31.795	38.18	247.67
出合道跡	1.375	2.75			4.5775	2.31	11.0125
日輪寺道跡					46.9875	55.95	102.9375
南別府道跡		0.66	0.66	0.66	0.625	2.5	5.105
吉田南道跡					15.5		15.5
計	10.375	54.53	105.78	185.53	158.1075	113.18	635.9825

遷に関して言及していく。

まず、Ⅰ期から庄内式期以降まで継続して住居遺構が一定数発見されている新方道跡、玉津田中道跡に関しては、本地域における拠点集落と断定して差し支えないであろう。そして、玉津田中道跡の南側に位置す

る出合道跡、今住居址は確認できなかったが吉田道跡、片山道跡など弥生前期集落が明石川河岸に密集しているため(図2)、河口付近から明石川を北上する、または西播磨の方角、つまり明石川西域から東に進む形で集落が形成されていったことが予想される。

Ⅱ・Ⅲ期に入ると、拠点集落の規模が拡大し、それに伴い居住・小山遺跡や今津遺跡など、拠点集落周辺に付随する形で新たな集落が形成されたことが推測される（図3、4）。また、明石川の支流である伊川河岸にも南別府遺跡や表山遺跡などの新たな集落が誕生し、当該地域の各地で安定した居住生活が営まれていたことが分かる。ただし、Ⅳ期に入ると頭高山遺跡や城ヶ谷遺跡などの高地性集落が出現（図5）、新方遺跡は増加しているが、反対に玉津田中遺跡と今津遺跡の人口が減少していることから、集落の高地化が急速に進んだことが分かる。

Ⅴ期に入ると、Ⅲ～Ⅳ期で減少していた玉津田中遺跡の人口は微増し、頭高山遺跡の集落は消滅、新たに吉田南遺跡や玉津田中遺跡周辺に位置する日輪寺遺跡、小山遺跡など沖積地上に集落が営まれていった（図6）ことが分かる。ただし、完全に高地性集落が消滅し、平地に人口が密集したわけではなく、城ヶ谷遺跡からはⅤ期の住居遺構が検出されていることから、高地に拠点を残した人々も存在していたと言える。また、Ⅴ期全体でみると、集落全体の規模は縮小傾向にあったことが推測される。

最後に庄内式期であるが、今回の住居遺構による分析では、拠点集落である新方遺跡・玉津田中遺跡とその周辺集落の存在は確認できたが、その規模はⅤ期同様縮小傾向にあることが分かる（図7）。また、城ヶ谷遺跡や表山遺跡等の高地性集落遺跡の住居遺構が確認できなくなることから、当該地域において高地性集落はⅤ期で姿を消し、低地集落中心の社会に変化したことが想定される。

5. 考察

（1）本地域における短期的人口変動の要因

明石川およびその支流の氾濫を中心とした自然災害
当該地域における人口変動の中で注目すべき点の一つが、Ⅲ期からⅤ期にかけての人口変動と居住域の変化である。原因の一つとしては、明石川およびその支流の大洪水が挙げられる。例えば、平成7年度に行われた玉津田中遺跡の発掘調査の際発見された弥生時代中期～後期にかけての水田址からは、洪水堆積物が確認されている（神戸市教育委員会2000a）。この洪水に関しては先行研究でもいくつか言及されている点ではあるが、今回算出した人口推定を用いて再考していく。

まず、Ⅲ期からⅣ期にかけて人口が増加しているが、これは期全体で算出しているためであり、実際はⅣ期の途中で人口増加率の減少が起こっていると考えられ

る。実際Ⅴ期の人口はⅣ期から減少していることが図8からも分かる。よって、Ⅳ期のある時点で大洪水が起こり、低地集落に居住していた人々が高地に避難したことが考えられる。

しかし、この説には補足すべき点があると考えられる。それは、あくまで大洪水による避難は一時的なものに過ぎないということである。根拠の一つが、Ⅳ期からⅤ期にかけての人口動態である。同時間における人口の増加率に関してはⅢ期～Ⅳ期間よりもⅣ期～Ⅴ期間の方が少なく、またⅣ期に高地性集落である頭高山遺跡や城ヶ谷遺跡が出現していることも事実ではある。ただし、低地集落の人口動態についてみると、Ⅳ期からⅤ期で縮小したものはあっても集落が見られなくなったのは居住・小山遺跡のみで、反対に吉田南遺跡や日輪寺遺跡など低地集落が増加していることが分かる。つまり大洪水が発生したのち、一時的に人々が避難し、その多くはまた低地に戻り集落を営んだのではないかと推測される。ここで、高地性集落が出現・消滅してしまった原因はどこにあるのかという問題が生じる。消滅の原因としては、食料の安定供給が不可能であった等が挙げられるが、出現そして消滅の他の理由に関しては、他地域との交流も要因の一つとして挙げられると考える。詳細は次項で後述する。

他地域（主に瀬戸内・畿内両地域）との交流 弥生前期の住居址が当該地域東部の明石川河岸に位置する低地集落遺跡から検出されていることはすでに4章3節で言及した。これは、西播磨地域や、その先にある吉備地域や讃岐地域といった瀬戸内地域からの流入が影響していることが想定される。後述するが、明石川流域の低地集落は瀬戸内地域との関係性が見られることが既に判明している。そのため、瀬戸内地域または瀬戸内地域の影響を受けた西播磨地域の人々が流入し、明石川流域でも集落が多く営まれるようになったのではないかと考えられる。

次に、前項でも言及したⅣ期における人口現象であるが、園原氏は明石川流域の低地集落と高地性集落におけるササキト石器、石鏡を中心とした研究で「低地集落は播磨地域の地域色をもちつつ瀬戸内沿岸地域との関係が強く、高地性集落は畿内地域（大阪湾沿岸地域）との関係が強く、東から移住してきた集落であることが判明した」と言及している（園原2020）。これを今回の人口推定と合わせて考察を進める。まず、Ⅳ期に入ると畿内地域から人々が流入し、瀬戸内地域との交流が行われている低地を避け高地に集落を営む。これに関して、前項では明石川の氾濫により一時的に

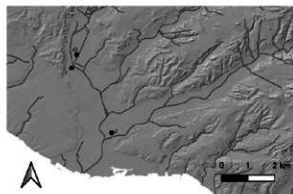


図2 I期における集落遺跡分布図

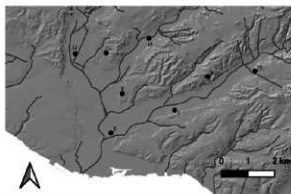


図5 IV期における集落遺跡分布図

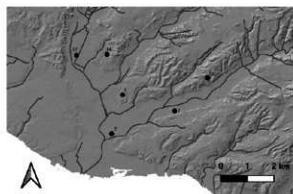


図3 II期における集落遺跡分布図

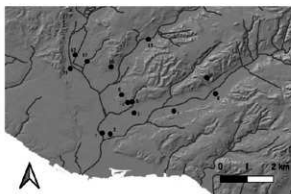


図6 V期における集落遺跡分布図

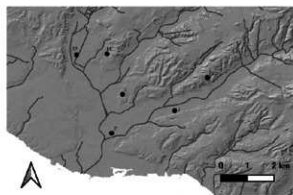


図4 III期における集落遺跡分布図

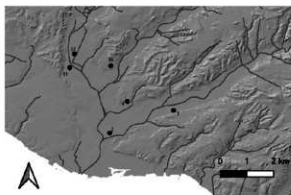


図7 庄内式期における集落遺跡分布図

図2~7はS=1/60000、遺跡番号は図1と対応

低地集落の人々が高地に避難したことを言及したが、先に述べた通り低地集落の人々は瀬戸内地域との交流があったとされるため、彼らと畿内地域の人々が共に高地性集落を営んだ可能性もあるが、低地集落に帰還した後に畿内地域の人々が流入し、独自の集落を高地に営んだことも考えられる。どちらの場合もその後、V期初頭までに何らかの事情で高地性集落の人々が当該地域から移住し、廃絶したという一連の流れになると考えられる。この「何らかの事情」であるが、可能性としては①低地集落に取り込まれる形となった②畿

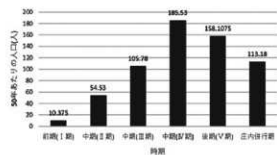


図8 時期別人口数グラフ

内地域に流出した③西播磨地域・瀬戸内地域方面に流出した、などが考えられるが明確な原因に関しては確認できていない。この中でも①に関しては低地集落の人口が増えたことが人口動態から確認できないこと、争いの痕跡も確認できないことから、可能性は薄いと考えられる。③に関しては、東播磨地域における庄内甕の出土は少なく西播磨地域の遺跡に集中していることから、可能性の一つとして提示した。ただし、どの場合においても畿内地域と東播磨地域の交流はⅤ期初頭段階で途切れてしまったと考えるのが妥当である。

（2）長期的人口変動の要因

瀬戸内地域との継続的な交流により流入した人々の定住化 前項で、当該地域における低地集落の人々は瀬戸内地域と関係性があることに関して言及した。この交流に関しては、低地集落のサヌカイト石器に用いられたサヌカイトの原産地に金山産のものが大部分を占めることから、弥生時代を通して続いていたことが判明している（園原 2020）。継続して瀬戸内地域から人々が流入することによって集落の規模が拡大し、もとより存在した播磨の文化の中に瀬戸内の文化が新たに加わることで文化的水準も向上、生活レベルが安定した結果としてそこに住む人の数が増加したことが、長期的人口変動の要因の一つであると考えられる。

本地域の立地条件 本地域は、明石川とその支流である伊川、榎谷川が流れる沖積地を中心とした地域である。そのため、生活用水を入手することが容易にでき、また広く平らな土地が広がっており、沖積地ということで適度に水はけが良いため、特に稲作に向いた土地となっている。そのため、コメを中心に安定した食料供給が可能となる。実際、玉津田中遺跡や新方遺跡その他多数の遺跡から水田遺構が検出されている。結果として、Ⅰ期からⅣ期までは人口の増加率が安定し、居住域も拡大していったのではないかと考えられる。このことは、Ⅳ期で出現した高地性集落がすぐに消滅した原因と関係しているとも考えられる。例えば、畿内地域の人々を中心として構成された高地性集落と播磨・瀬戸内地域を中心とする人々で構成された低地集落との間で交流が少ない、または両者が対立していた場合、稲作で安定した食糧供給が可能であったと考えられる低地集落からの食糧供給が行われなかったり、低地に新たな水田を高地性集落側が確保することも困難であったりした可能性がある。結果として居住空間として不向きだと判断し、他地域へと移動したことで、

高地性集落は消滅したと考えることもできるのではないか。

おわりに

本稿では、明石川流域の弥生集落における人口動態を、住居遺構とその面積を用いて分析し、その結果から当時の様相について検討した。そして、Ⅰ期からⅣ期にかけての人口増加、Ⅳ期からⅤ期にかけての人口増加率減少を数値として確認し、その原因を立地する位置や洪水等の自然的要因、畿内地域・瀬戸内地域との関わり（＝外的要因）といった観点から言及していった。特に、庄内式期において東播磨地域と畿内地域との関係性が途絶えたことに関しては動態からも確認し、考察を深めることができた。しかし、高地性集落に居住していた畿内地域の人々が東播磨地域から移動した原因と、その移動先に関しては不明な点が多いため、今後の検討課題である。また、人口推定に関しても今回は発見された住居址数分のみの人口算出となってしまうため、動態を中心とした推定にとどまることとなり、未発見遺構や削平等によって消滅した遺構などを考慮に入れた静態研究まで着手することはできなかった。やはり発見された住居址と実際に存在した住居数の差や、弥生時代全体における絶対年代による時期区分の意見が分かれていることが人口静態推定の大きな障壁となっているが、実際の集落規模を測るためには静態研究も必要不可欠であるため、今後の研究に期待したい。

謝辞

本論は2022（令和4）年度、立命館大学文学部に提出した卒業論文であります。作成にあたり、長友朋子先生から内容及び方法に関して多くのご指導を頂きました。また、中村大先生にも様々な助言を頂きました。心より感謝申し上げます。

注

- 1) 住居のライフサイクルというのは1. 計画→2. 構築→3. 生活→(4. 改修)→5. 廃絶→6. 埋没1. 計画…というものである（小林1999）。
- 2) 吉田遺跡調査団の調査によると、「城山台地の平坦部は、中世の枝吉城築城時に削平、整地され、ほとんどその原形を失っている」ということが判明し、弥生前期の面や土層がほぼ残されていない状態であったとされている（神戸市玉津土地区画整理組合、1978）。

- 3) 表2に記載されている遺構数の合計が、集成表に記載されている遺構数の合計よりも少なくなっているのは、集成表の中に重複した同遺構が存在しており、その重複を考慮したからである。

参考文献

- 荒木幸治 2012 「播磨・摂津・淡路の弥生集落とその動態」『近畿弥生の会企画シンポジウム「弥生時代集落の実像と動態を探る—モデル論を超えて—」発表要旨集』近畿弥生の会
- 今村啓爾 1997 「縄文時代の住居址数と人口の変動」『住の考古学』同成社 pp. 45-60
- 大手前大学史学研究所 2007 「弥生土器集成と編年—播磨編—」大手前大学史学研究所
- 小澤佳恵 2000 「集落動態からみた弥生時代前半期の社会—玄界灘沿岸域を対象として—」『古文化談叢』第45集 九州古文化研究会 pp. 1-42
- 姜東錫 2020 「韓国初期複雑社会の集落体系の比較」雄山閣
- 岸本道昭 1999 「播磨弥生社会はどう変わったか」『みづほ』第30号 大和弥生文化の会 pp. 90-100
- 神戸市玉津土地区画整理組合 1978 「吉田森友のあゆみ：神戸市玉津土地区画整理事業の記録」神戸市玉津土地区画整理組合
- 小林謙一 1999 「縄文時代中期集落における一時的集落景観の復元」『国立歴史民俗博物館研究報告』第82集 国立歴史民俗博物館 pp. 95-121
- 小林謙一 2008 「縄紋社会研究の新視点—炭素14年代測定の利用—」六一書房
- 小山修三 1984 「縄文時代—コンピューター考古学による復元—」中央公論社
- 篠宮正 2007 「東播磨地域における弥生土器編年」『弥生土器集成と編年—播磨編—』大手前大学史学研究所
- 新修神戸市史編集委員会 1989 「新修神戸市史 歴史編Ⅰ 自然・考古」神戸市
- 園原悠斗 2020 「弥生時代における低地集落と高地性集落—石簾からみた明石川流域の小地域様相—」『考古学研究』第66巻第4号 考古学研究会 pp. 70-89
- 田中良之 1991 「いわゆる渡来説の再検討」『横山浩一先生退官記念論文Ⅱ 日本における初期弥生文化の成立』横山浩一退官記念事業会
- 富山直人 2012 「播磨における古墳時代の集落—渡来人の動向を中心として—」『古代学研究会 2012 年

- 度拡大例会シンポジウム資料集 集落から探る古墳時代中期の地域社会—渡来文化の受容と手工業生産—』古代学協会
- 中村大 2018 「縄文時代の人口を推定する新たな方法—東北地方北部を対象とした試み」『環太平洋文明研究』第2号 雄山閣 pp. 39-58
- 中村大 2021 「秋田県米代川流域における縄文時代の人口現象と土坑儀礼の変化—圏論に着想を得たモデル化の試み—」『環太平洋文明研究』第5号 雄山閣 pp. 55-75
- 発掘された明石の歴史実行委員会 2010 「明石の弥生人」発掘された明石の歴史実行委員会
- 前田佳久 2001 「大阪湾北岸地域の弥生集落—神戸市域を中心に—」『みづほ』第35号 大和弥生文化の会 pp. 50-65
- 松本武彦 2014 「人口と集落動態からみた弥生・古墳移行期の社会変化：吉備中南部地域を中心に」『国立歴史民俗博物館研究報告』第185集 国立歴史民俗博物館 pp. 139-154
- 丸山潔 1992 「弥生集落の動態(1)—摂播国境地域」『究班—埋蔵文化財研究会 15周年記念論文集—』埋蔵文化財研究会 pp. 49-58
- 矢野健一 2006 「関西地方の縄文後晩期住居」『第55回埋蔵文化財研究会弥生集落の成立と展開 発表要旨集』埋蔵文化財研究会 pp. 275-290
- 矢野健一 2017 「縄文時代における人口問題の重要性」『環太平洋文明研究』第1号 pp. 11-22
- 若林邦彦 2009 「集落分布パターンの変遷からみた弥生社会」『国立歴史民俗博物館研究報告』第149集 国立歴史民俗博物館 pp. 33-53
- 参考報告書**
- 淡神文化財協会 1993 「玉津田中遺跡 発掘調査報告書Ⅱ」淡神文化財協会
- 神戸市教育委員会 1984 「昭和57年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会
- 神戸市教育委員会 1984a 「新方遺跡発掘調査概要 居住遺跡発掘調査概要」
- 神戸市教育委員会 1985 「昭和57年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会
- 神戸市教育委員会 1986 「昭和58年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会
- 神戸市教育委員会 1992 「平成元年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会
- 神戸市教育委員会 1995 「平成4年度神戸市埋蔵文化

財年報」神戸市教育委員会
 神戸市教育委員会 1996『平成5年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
 神戸市教育委員会 1997『平成6年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
 神戸市教育委員会 1998『平成7年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
 神戸市教育委員会 1999『平成8年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
 神戸市教育委員会 2000『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
 神戸市教育委員会 2001『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
 神戸市教育委員会 2007『平成16年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
 神戸市教育委員会 2010『平成19年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
 神戸市教育委員会 2011『平成20年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
 神戸市教育委員会 2013『平成22年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
 神戸市教育委員会 2017『平成26年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
 神戸市教育委員会 2020『平成29年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
 神戸市教育委員会 1984a『新方遺跡発掘調査概要 居住遺跡発掘調査概要』神戸市教育委員会
 神戸市教育委員会 1984b『神戸市文化財年報』神戸市教育委員会
 神戸市教育委員会 2000a『玉津田中遺跡発掘調査報告書 第8・10・12・13・15次調査』神戸市教育委員会
 神戸市教育委員会 2002a『日輪寺遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会
 神戸市教育委員会 2003a『今池尻遺跡 新方遺跡平松地点 発掘調査報告書』神戸市教育委員会

神戸市教育委員会 2003b『新方遺跡 野手西方地区発掘調査報告書1』神戸市教育委員会
 神戸市教育委員会 2006『吉田南遺跡第17・18次調査発掘調査報告書』神戸市教育委員会
 神戸市教育委員会 2009a『日輪寺遺跡 第10・11・12次発掘調査報告書』神戸市教育委員会
 神戸市教育委員会 2011『出合遺跡第34・35・37・39・40・43・44次埋蔵文化財発掘調査報告書』神戸市教育委員会
 神戸市教育委員会 2013『出合遺跡第45・46次発掘調査報告書』神戸市教育委員会
 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1994a『玉津田中遺跡—第1分冊—』兵庫県教育委員会
 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1994b『玉津田中遺跡—第2分冊—』兵庫県教育委員会
 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1995a『玉津田中遺跡—第3分冊—』兵庫県教育委員会
 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1995b『玉津田中遺跡—第4分冊—』兵庫県教育委員会
 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1996『玉津田中遺跡—第5分冊—』兵庫県教育委員会
 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1996『玉津田中遺跡—第6分冊—』兵庫県教育委員会
 兵庫県教育委員会 2000『表山遺跡・池ノ内群集墳』兵庫県教育委員会
 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2001『長坂遺跡』兵庫県教育委員会
 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2002『上脇遺跡』兵庫県教育委員会
 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2006『吉田南遺跡』兵庫県教育委員会

図版出典

図1～8 筆者作成

表1～4、集成表 筆者作成

研究論文

備前焼大甕の容量変遷とその要因

— 内容量記載資料の分析を中心に —

立花唯翔

要 旨

中世の大甕のうち現在の岡山県備前市伊部周辺で生産されていた備前焼大甕は、器高が 60 cm 以上の大甕と定義される巨大な製品であり、内容量を示す線刻が存在するという資料的特徴を有する。この容量に関わる資料的特徴は、国内の他の陶磁器製品に類を見ないような特異なものであると同時に、大甕の消費の様相や中世当時の耕制の変遷をはじめとした制度史・社会史に関わる様々な情報を内包するものである。しかし、備前焼大甕はその容量の持つ情報の重要性が古くから指摘されるものの、容量に関する研究はほとんど行われておらず、不明な点が多い。そこで本稿では備前焼大甕の容量計測から中世における備前焼大甕の器形と容量の変遷を明らかにすること、内容量が記載された大甕の容量変化を整理することを目的に、西日本に分布が確認される 163 点の備前焼大甕を集成し、容量計測を行った。

備前焼大甕の頭部容量を計測した結果、全時代の備前焼大甕は「170 ℓ 以下 (1 類)」、「195 ℓ 以上 (2 類)」という容量を基にした分類ができる。各時期の器形と容量の分析からは、16 世紀後半に備前焼大甕の器形の長胴化と容量の増加が顕著であることが明らかにできた。

また、備前焼大甕の内容容量記載資料の分析からは、16 世紀前半から 17 世紀前半における内容量を示す線刻の年代観と容量の整理した。その結果、16 世紀前半から後半にかけて内容量記載資料の容量が増加するに伴って線刻の示す一石の値が大きくなること、三石入りの大甕が衰退し、二石入りの大甕が占める割合が大きくなること、大甕の作りや線刻の表記が丁寧になるなどの変化が確認できた。

以上のことから、備前焼大甕は 16 世紀前半から後半にかけて器形・容量・線刻に大きな変化が確認でき、この時期に備前焼大甕の品質改良が生じたと捉えられ、この変化の要因として備前焼大甕の容量の規格保証が要因であると推察される。内容量記載資料からの分析から、備前焼大甕の容量の基準となる柄は「売升」と呼ばれる西日本で広域使用圏を形成する商業柄の容量に近似していることが推測される。備前焼大甕の容量が西日本の中世社会における経済活動の一端を反映しているといえるだろう。

キーワード：中世、西日本、大甕、備前焼、容量

はじめに

現在の岡山県備前市伊部周辺で生産された備前焼大甕は、畿内・瀬戸内海周縁部を中心とする西日本の広い範囲で分布が確認され (伊藤 2008)、複数個の大甕を埋設した埋甕遺構や甕棺墓など様々な検出例が数多く報告されていることから、備前焼大甕は中世の西日本で幅広い用途で利用された代表的な貯蔵具であるといえるだろう。

この備前焼大甕であるが、その大甕が有する「大きさ」と「線刻」の 2 種類が資料的特徴としてあげられる。

備前焼大甕の「大きさ」については、器高 100 cm を超えるようなものも存在することから、「備前焼の器種においてばかりではなく、国内の陶磁器全体から見ても最大級の法量をもつ製品群 (上西 2001 653 頁)」と評されるように、他産地の大甕と比較して容量の大

きな製品であることが知られる。

備前焼大甕の「線刻」については、一部の備前焼大甕の肩部に「二石入」「三石入」というような大甕の容量を示す線刻が施されていることがある¹⁾。この容量を示す線刻は、貯蔵量など大甕の用途に大きく関係する容量を端的に理解するという機能的な情報を示すものであると同時に、一目でその大きさを把握できるものであるといえる。他産地の大甕では、このような内容量を示す線刻が確認できるものはわずかであり、このような容量を示す線刻は備前焼大甕を代表する特徴であるといえるだろう。

このことから、備前焼大甕はその大きさと線刻による内容量表示に特徴がある製品であるといえる。この 2 つの特徴は、大甕の機能や用途を考えるうえでの大事な要素であると同時に、内容量を示す線刻・紀年銘・

型式分類などというような様々な情報を組み合わせることで、当時の大甕の生産・消費の様相やその要因となる社会制度や産業の変化などを明らかにする判断材料になる。これは臼井洋輔氏が「秀吉の検地石直しにかかわるわが国の柵制の発達や地域性を側面から調べる手段になるかも知れない（臼井1984 52頁）」と指摘するように、備前焼大甕の容量が当時の社会の様相を明らかにする判断材料になる可能性を秘めていることを示している。

ところが、備前焼大甕の容量に関する研究は以前からその重要性が指摘されているものの、ほとんど行われていないのが現状である。これらの点を踏まえて本稿では、中世西日本における備前焼大甕を集成し、容量分析を行うことで、備前焼大甕の容量の変遷とその要因について考察する。

1. 備前焼大甕の容量に関する研究史の現状と課題

備前焼大甕に関する研究は間壁忠彦氏・乗岡実氏・重根弘和氏らによる分類（間壁1990、乗岡2001、重根2003、2014、2022）や伊藤晃氏による全国を対象にした集成（伊藤2008）などがあり、中世備前焼全体の分類・集成の中で大甕の年代観や各時期の流通の様相が明らかにされてきた。これまでの備前焼大甕に関する研究は、型式分類による年代区分の確立、集成による分布の把握など、年代・流通の問題に焦点を当てて行われてきたといえるだろう。

そのため、備前焼大甕に関する研究のうち、大甕の容量に注目された研究は数例にとどまるに過ぎない。この備前焼大甕の容量に関する研究については、「法量に着目した研究」、「実容量に着目した研究」の2つの流れに基づいて説明できる。

「法量に着目した研究」は、伊藤晃氏・上西節雄氏による紀年銘入備前焼大甕の法量計測（伊藤・上西1977）や藤原里香氏による備前焼大甕の観察と法量の計測（藤原2000）がある。これらの研究では、16世紀後半から17世紀前半における時代の資料が分析対象となり、実年代に沿った備前焼大甕の法量の変遷が明らかにされた。

「実容量に着目した研究」については、主に「実容量の検証」という目的のもと研究が深められてきた。主な事例としては、堺環濠都市遺跡（SKT21 地点）で出土した備前焼大甕の線刻で示された内容量と実容量の整合性の検証（堺市教育委員会1984）のほか、臼井洋輔氏による紀年銘資料を中心とした備前焼大甕の分

析がある。臼井氏は、「二石入」「三石入」と内容量が記載された16世紀後半の備前焼大甕がほぼ同じような大きさであることを指摘し、実際に備前焼大甕3点に水を直接注水することで、それぞれの容量が近似することを明らかにした。さらに、臼井氏は室町時代の柵の容量を算出し、それを大甕の実容量と比較することで、大甕の記載内容の変化が柵制の変化によるものであると推察し、備前焼大甕の容量と柵制の関係性を指摘した（臼井1984）。この臼井氏による先行研究は、備前焼大甕の容量と柵制の変遷の関係を検討した唯一の事例であると同時に、備前焼大甕の容量の変遷とその要因を予察し、備前焼大甕の容量が持つ情報の重要性を示した論考である。

ここまで、備前焼大甕の容量に関する先行研究を振り返ってきた。これまでの備前焼大甕の容量に関する研究は、法量と実容量に基づく2つの視点に分けられる。それぞれ、大甕に施された文字情報と容量に関する情報を組み合わせて、実年代に基づいた「大きさ」の変遷と記載容量の検証が行われている。しかし、備前焼大甕の容量に関する先行研究は、先述のとおり型式分類や分布に関する先行研究が充実しているものの容量に焦点が当てられた研究が極めて少ないという問題に加えて、「分析の紀年銘資料への偏り」、「中世柵の認識不足」の2つの課題があげられる。

「分析の紀年銘資料への偏り」は、これまで容量の検討が行われてきた備前焼大甕が、紀年銘資料が中心であるという問題である。製作年代が確定する紀年銘資料は、その年代の特徴を決定づける上で重要な資料であることは明確であり、伊藤・上西両氏や臼井氏の先行研究においても各年代の大甕の様相を把握するための実年代資料として扱われた。しかし、備前焼大甕の紀年銘資料はその多くが16世紀後半から17世紀前半の年代を示すものが大半を占めるため、時代的偏りが確認される。そのため、これまでの先行研究では16世紀後半以前の備前焼大甕の容量についてはほとんど検討されておらず、中世全体における容量の変遷については不明点が多い。

「中世柵の認識不足」は、大甕の容量が検討される際に中世柵の容量への理解が不十分な点に問題がある。中世柵の容量については宝月圭吾氏の先行研究（宝月1961）などで、近世に入るまで全国各地に様々な容量を有する柵が乱立したことがすでに示されている。しかし、発掘調査報告書などで掲載される容量は「一石＝約180ℓ」という現在の柵に当てはめた容量で単純に認識される場合が多く、備前焼大甕の製作年代の

状況を反映したものであるとはいえない。そのような背景の中で、白井氏は備前焼大甕の容量の変化を中世の柵制と対応させるために室町時代の柵の容量を算出して比較を行ったが、算出された柵の容量は1例のみであり、中世柵の複雑な乱立状況を示したものであると言ひ難い。文献資料から得られた中世柵に関する知見と考古資料としての備前焼大甕との比較が不十分であることが、中世に製作された備前焼大甕の容量を分析するうえで大きな障壁となっている。

以上のことから、備前焼大甕の容量については時期の偏りのある紀年銘資料の性質により16世紀後半以前の中世の大部分の資料の計測がほとんど行われていないほか、大甕に記載された内容量が現代の柵制に基づいて単純に理解されているという問題がある。この問題を解決するにあたって、紀年銘資料以外の備前焼大甕を加えた容量分析によって、中世全体の容量の変化を追うこと、中世柵の容量を算出し、それを照らし合わせることによって、大甕の容量を決定づける単位の設定を行い、その変遷を明らかにすることが、中世における備前焼大甕の容量の意図を解明するうえで重要なポイントになるだろう。

2. 研究の目的と方法

本稿では先行研究の課題を踏まえて、中世における備前焼大甕の容量の変遷を示し、中世柵との関連性について言及することを目的とする。まず、備前焼大甕を集成し、容量計測を行うことで、中世の各時期における備前焼大甕の容量の特徴と変遷を示す。また、内容量が記載された資料については、記載容量が示す一石を算出し、中世柵の容量と照らし合わせることで、備前焼大甕の容量と中世柵の関連性について考察する。研究の方法については、以下のとおりである。

(1) 分析資料の集成と分類

まず、容量の計測にあたり資料の集成を行った。本稿で集成の対象とした資料は、近畿地方（ただし滋賀県・奈良県を除く）、中国・四国地方（ただし鳥取県・島根県を除く）、福岡県に分布が確認される備前焼大甕のうち器高が60.0 cm以上（伊藤・西 1977）であり、実測図で底部から口縁端部まで復元できる、著しい歪みのないものを計163点集成した（表2-5）。集成を行った備前焼大甕は報告書に実測図が掲載されているものがほとんどであるが、紀年銘や内容量が施され重要であると判断したものについては、「Agisoft Metashape」を用いた三次元計測により、実測図を作成した。

また、本稿では備前焼大甕の年代観と分析資料数の兼ね合いから、重根編年（重根 2014）をもとに中世をⅠ～Ⅳの4期に分ける時期区分を設定した。本稿の時代区分と重根編年の対応関係は表1で示したとおりである。

(2) 容量計測の方法と主要分析項目

本稿で行う陶器製大甕の容量計測手段は「円柱集計算出法」を採用する。円柱集計算出法は実測図を用いて大甕の内面を円柱の総体として捉えるものであり、大甕の内面に細かく積み重ねた円柱の体積（ $V = \pi r^2 h$ ）の合計を大甕の容量とする。

円柱集計算出法は実測図が入手できれば比較的短時間で簡単に容量を計測できるといふ長所があり、縄文土器や土師器の容量計測などに広く活用されている。しかし、この方法は内面を円柱の総体に置き換えたものを容量として認識するため、「土器の曲線部分を円柱として直線処理するため誤差が生じることは避けられない（高瀬 2021 206 頁）」と指摘されるように、大甕内面の形状を完全に正確には捉えることができないという課題がある。円柱集計算出法による容量計測は個々の円柱の高さ（ h ）を1 cmに統一して算出する場合が多いが、本稿では個々の円柱の高さを0.5～0.7 cmと細かく設定することで、計測精度を向上させた。

表1 本稿の時期区分と重根編年

世紀	本篇の時期区分		重根編年の時期区分 (重根 2014)
13 世紀	Ⅰ 期		Ⅱ A
14 世紀			Ⅱ B
			Ⅲ A
			Ⅲ B
15 世紀	Ⅱ 期		Ⅳ A
			Ⅳ B
16 世紀	Ⅲ 期	Ⅲ a	V A
		Ⅲ b	V B
17 世紀	Ⅳ 期		Ⅵ A

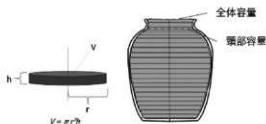


図1 円柱集計算出法のイメージ図と計測位置

表2 備前焼大甕集成表1

番号	地域	道路名	器高 (cm)	胴部 最大径 (cm)	相対的 径差	全体容量 (L)	胴部容量 (L)	記載 容量	本稿の 時期区分	重複 編年	紀年銘	報告書 番号	管理番号
1		宇治市街道跡	86.4	78.0	110.76923	276.2	263.2		I期	ⅢB		1	8 国-T39
2		平安京左京六条 三坊五町	85.6	76.4	112.04188	265.3	257.0		I期	ⅢB		2	国版-41-8
3	山城国	平安京左京八条 三坊九町	95.6	78.8	121.31980	311.4	298.0		I期	ⅢA		3	国-26-234
4		平安京左京八条 一坊十六町	80.8	69.0	117.10145	227.9	218.3		I期	ⅢB		4	国-26-113
5	摂津国	大阪城跡	89.4	79.5	112.45283	268.2	255.3		I期	ⅢB		5	国-42-159
6	摂津国	兵庫津道路	68.8	73.6	93.47826	166.8	160.2		I期	ⅢA		6	国版 126-1188
7	摂津国		90.0	80.5	111.80124	292.0	281.0		I期	ⅢB		7	91 国-210
8	紀伊国	長寿寺境内	68.0	62.5	108.8	131.0	125.1		I期	ⅢB	1342(康永 元)年	8	国-1-1
9		大野道路	85.5	80.0	106.875	283.3	268.8		I期	ⅢA		9	国版-8-240
10	播磨国		85.7	73.4	116.75749	281.7	274.1		I期	ⅢB		10	11 国 SK101-A
11		南上山道路	86.1	70.3	122.47511	212.7	206.5		I期	ⅢB		10	11 国 SK101-B
12			91.2	78.6	116.03053	317.2	307.0		I期	ⅢB		10	12 国 SK102
13	美作国	久田・瀬ノ内道路	61.6	57.6	106.94444	106.4	101.1		I期	ⅢA		11	508 国-1227
14			82.8	73.6	112.5	231.5	224.0		I期	ⅢB		11	545 国-1270
15	備前国	百間川原尾島道路	75.0	73.8	101.62602	217.1	208.3		I期	ⅢA		12	229 国-2061
16			83.0	80.0	103.75	246.8	242.2		I期	ⅢA		13	3 国-5
17			87.0	78.0	111.53846	259.7	249.0		I期	ⅢA		14	7 国-78
18			82.8	78.0	106.15385	232.8	219.7		I期	ⅢB		15	11 国-86
19	備後国	草戸千軒町道路	82.0	83.0	98.79518	345.2	322.8		I期	ⅢB		16	6 国-57
20			85.0	82.0	103.65854	274.9	265.2		I期	ⅢA		17	14 国-110
21			79.8	75.0	106.4	221.9	212.8		I期	ⅢA		18	15 国-142
22	安芸国	善福寺南道路	75.0	58.5	128.20513	118.6	113.7		I期	ⅢB		19	5-3 国
23	讃岐国	東山崎・水田道路	61.8	50.4	122.61905	92.0	88.1		I期	ⅢB		20	104 国-139
24	阿波国	中庄東道路	72.3	59.4	121.71717	131.5	127.9		I期	ⅢB		21	575 国-999
25	土佐国	坂本道路	79.2	72.0	110	278.3	258.4		I期	ⅢA		22	124 国-2172
26	伊予国	湯築城	72.4	66.0	109.69697	162.7	156.2		I期	ⅢB		23	109 国-707
27	筑前国	博多道路群	72.4	65.0	111.38462	154.9	150.5		I期	ⅢB		24	Fig39-148
28			86.4	75.6	114.28571	287.8	279.7		Ⅱ期	ⅣB		25	36 国-101
29			83.7	75.6	110.71429	210.2	204.8		Ⅱ期	ⅣB		25	41 国-108
30	山城国	山科本願寺跡	90.0	74.4	120.96774	277.1	269.0		Ⅱ期	ⅣB		25	42 国-109
31			90.0	79.2	113.63636	300.4	291.8		Ⅱ期	ⅣB		25	45 国-114
32			83.2	79.2	105.05051	266.0	255.4		Ⅱ期	ⅣB		25	47 国-117
33		能峨野道路群	81.6	76.0	107.36842	259.3	249.1		Ⅱ期	ⅣB		26	109 国-55-210
34		長比道路	61.3	49.6	123.58871	71.2	67.7		Ⅱ期	ⅣB		27	国版-24-49
35	摂津国		97.0	82.5	117.57576	364.0	344.7		Ⅱ期	ⅣA		7	66 国-115
36		兵庫津道路	90.4	81.6	110.78431	328.8	319.9		Ⅱ期	ⅣB		6	国版 122-1064
37	和泉国		86.0	76.0	113.15789	263.5	254.8		Ⅱ期	ⅣB		28	77 国-1
38	和泉国	堺環濠都市道路	80.4	74.4	108.06452	206.6	200.9		Ⅱ期	ⅣB		29	33 国
39	和泉国		63.6	51.6	123.25581	87.3	84.1		Ⅱ期	ⅣB		30	38 国-36
40	紀伊国	川岡道路	87.8	76.8	114.32292	275.2	266.6		Ⅱ期	ⅣB		31	141 国-1488
41			84.8	75.0	113.06667	292.0	281.4		Ⅱ期	ⅣA		32	50 国-428
42	河内国	天野山金剛寺	87.9	82.8	106.15942	302.2	287.9		Ⅱ期	ⅣA		32	52 国-429
43		円満寺東の谷道路	72.0	66.6	108.10811	152.3	146.6		Ⅱ期	ⅣB		33	109 国-234-2
44	播磨国	室津4丁目道路	75.8	80.0	94.75	267.7	254.8		Ⅱ期	ⅣA		34	12 国-3
45	美作国	久田・瀬ノ内道路	84.6	78.3	108.04598	267.1	259.0		Ⅱ期	ⅣB		11	544 国-1269

表3 備前焼大塚集成表2

番号	地域	遺跡名	器高 (cm)	胴部 最大径 (cm)	相対的 深さ	全体容量 (L)	胴部容量 (L)	記載 容量	本稿の 時期区分	重複 編年	紀年銘	報告書 番号	管理番号
46	備前国	すく毛山遺跡	66.6	57.2	116.43357	118.7	112.9		Ⅱ期	ⅣB		35	25 国
47		百間川当麻遺跡	86.4	79.3	108.95334	270.4	256.1		Ⅱ期	ⅣB		36	109 国-58
48			66.4	56.0	118.57143	106.2	102.5		Ⅱ期	ⅣB		37	36 国-76
49	備中国	大村遺跡	66.4	58.4	113.69863	110.4	107.1		Ⅱ期	ⅣB		37	60 国-176
50			64.0	60.0	106.66667	116.7	112.7		Ⅱ期	ⅣB		37	61 国-177
51		張池遺跡	70.5	58.2	121.13402	110.2	104.2		Ⅱ期	ⅣB		38	64 国-224
52	備後国	尾道遺跡	94.4	79.2	119.19192	313.4	305.9		Ⅱ期	ⅣB		39	9 国-11
53		廿日市町屋跡	70.8	63.6	111.32075	143.0	138.3		Ⅱ期	ⅣB		40	66 国-314
54	安芸国	石佛遺跡	62.9	58.2	108.07560	107.7	101.1		Ⅱ期	ⅣB		19	1-101 国-306
55		善福寺遺跡	73.2	64.2	114.01869	160.9	153.7		Ⅱ期	ⅣB		41	4-8 国-24
56	周防国	大向門前遺跡	60.0	48.6	123.45679	75.0	72.9		Ⅱ期	ⅣB		42	国40-4
57		庵河内遺跡	74.8	65.6	114.02439	158.1	153.3		Ⅱ期	ⅣA		43	22 国-71
58	長門国	長門国府	84.0	82.4	101.94175	308.0	296.9		Ⅱ期	ⅣA		44	8 国-7
59	讃岐国	香西南西打道跡	71.0	62.4	113.78205	138.5	132.3		Ⅱ期	ⅣB		45	10 国-38
60		東山崎・水田遺跡	91.8	87.6	104.79452	305.3	298.9		Ⅱ期	ⅣB		20	198 国-596
61	阿波国	中庄東遺跡	69.0	60.0	115	135.5	129.3		Ⅱ期	ⅣB		46	国572-996
62	土佐国	田村遺跡	66.6	61.2	108.82353	127.8	121.9		Ⅱ期	ⅣB		47	国163-34
63	土佐国	弘人遺跡	69.6	58.4	119.17808	118.7	115.6		Ⅱ期	ⅣB		48	34 国-252
64		湯築城	67.3	59.1	113.87479	127.9	123.1		Ⅱ期	ⅣB		23	国80-309
65		道後今市遺跡	73.2	59.2	123.64865	136.8	130.9		Ⅱ期	ⅣB		49	国135- NO.198
66	伊予国	ウラショウジ遺跡	76.4	56.8	134.50704	89.9	84.0		Ⅱ期	ⅣB		50	37-067 (2号墓)
67		西神寺	92.0	80.8	113.86139	261.9	251.8		Ⅱ期	ⅣA		50	37-064
68		間住	72.8	65.6	110.97561	129.6	122.2		Ⅱ期	ⅣB		50	37-062
69			76.2	73.8	103.25203	207.5	198.4		Ⅱ期	ⅣB		51	41 国31-01
70			81.6	75.0	108.8	236.1	224.9		Ⅱ期	ⅣB		51	41 国31-02
71			60.0	59.2	101.35135	115.6	109.1		Ⅱ期	ⅣB		51	46 国32-01
72	海中	水の子岩海底遺跡	70.0	62.1	112.72142	134.5	126.7		Ⅱ期	ⅣB		51	46 国32-02
73			70.9	65.0	109.07692	156.8	146.0		Ⅱ期	ⅣB		51	46 国32-03
74			68.8	62.0	110.96774	136.5	129.7		Ⅱ期	ⅣB		51	46 国32-04
75			73.1	64.9	112.63482	152.3	145.4		Ⅱ期	ⅣB		51	47 国32-05
76	筑紫国	博多遺跡群	80.0	70.0	114.28571	225.0	215.6		Ⅱ期	ⅣB		52	Fig19-27
77			84.5	82.5	102.42424	298.5	281.6		Ⅲa期	ⅣA		53	国142-32
78			104.0	84.0	123.80952	373.3	358.7		Ⅲa期	ⅣA		25	38 国-103
79			98.0	84.6	115.83924	313.4	300.6	三人	Ⅲa期	ⅣA		25	40 国-106
80			91.8	81.3	112.91513	331.4	310.5	三人	Ⅲa期	ⅣA		25	43 国-111
81	山城国	平安京路左京一条 二坊十四町 (左殿・因殿司)	94.4	78.8	119.79695	312.4	290.7		Ⅲb期	ⅣB		54	55 国-1007
82		平安京左京四条 四坊三町	106.0	86.5	122.54335	408.3	375.2		Ⅲb期	ⅣB		55	国70-444
83		平安京左京四条 四坊一町	99.7	85.2	117.01878	349.6	329.2	参石入	Ⅲb期	ⅣB		56	国版29-105
84		沢の鶴大石蔵	104.0	79.5	130.81761	313.6	293.3		Ⅲb期	ⅣB		57	40 国-34
85		御影渡返し蔵	102.6	81.0	126.66667	361.5	335.7		Ⅲb期	ⅣB		58	p.13
86			99.2	85.6	115.88785	362.8	331.4	参石入	Ⅲb期	ⅣB		59	32 国-96
87		久宝寺内町遺跡	98.0	78.0	125.64103	299.2	275.6		Ⅲb期	ⅣB		59	34 国-102
88	摂津国		100.0	77.2	129.53368	292.0	263.4		Ⅲb期	ⅣB		59	34 国-103
89		津田城跡	74.2	56.0	132.5	110.4	100.1		Ⅲb期	ⅣB		60	28 国-16
90		平野環濠都市遺跡	72.0	64.0	112.5	140.2	131.4	二人	Ⅲa期	ⅣA		61	国2
91		大阪城跡	94.0	79.5	118.23899	311.1	296.0	武石入	Ⅲb期	ⅣB		62	国9-11
92		兵庫津遺跡	90.8	81.6	111.27451	320.3	303.0		Ⅲa期	ⅣA		63	647 国-583

表4 備前焼大甕集成表3

番号	地域	道路名	器高 (cm)	胴部 最大径 (cm)	相対的 径差	全体容量 (L)	胴部容量 (L)	記載 容量	本稿の 時期区分	重複 編年	紀年路	報告書 番号	管理番号
93	和泉国	堺環濠都市道路	100.0	90.4	110.61947	435.9	415.6		Ⅲa期	VA	64	57 図-3	
94			97.6	84.8	115.09434	362.1	343.0		Ⅲb期	VB	65	319 図	
95			104.8	88.6	118.28442	400.7	373.1		Ⅲb期	VB	65	320 図-1	
96			81.6	77.6	105.15464	249.9	235.8	三入	Ⅲa期	VA	65	321 図-4	
97			89.6	77.6	115.46392	278.8	266.1	二石入	Ⅲa期	VA	66	109 図-6	
98			66.2	58.2	113.74570	104.3	99.3		Ⅲa期	VA	67	114 図	
99			90.0	82.5	109.09091	328.3	309.9	三入	Ⅲa期	VA	68	裏表紙	
100			105.6	82.8	127.53623	421.1	399.8		Ⅲb期	VB	69	12 図-1	
101			92.0	84.8	108.49057	322.6	306.3		Ⅲb期	VB	70	8 図-8	
102			91.2	76.4	119.37173	258.1	247.3		Ⅲb期	VB	70	8 図-9	
103			104.0	91.2	114.03509	413.7	392.8	三石入	Ⅲb期	VB	70	9 図-10	
104			107.6	85.1	126.43948	373.1	352.8	三石入	Ⅲb期	VB	70	25 図-244	
105			90.8	83.4	108.87290	330.0	308.3		Ⅲa期	VA	70	25 図-245	
106			98.4	84.6	116.31206	314.2	285.6		Ⅲb期	VB	30	32 図-2	
107			90.0	81.0	111.11111	314.7	295.0		Ⅲa期	VA	71	86 図-243	
108			89.3	81.0	110.24691	265.8	253.9		Ⅲa期	VA	72	24 図	
109			92.0	76.0	121.05263	249.4	235.5		Ⅲb期	VB	72	26 図	
110			102.0	86.0	118.60465	399.0	356.2		Ⅲb期	VB	72	27 図	
111			94.5	80.0	118.125	321.5	304.7	二石入	Ⅲb期	VB	72	49 図	
112			91.0	86.0	105.81395	356.6	332.6	三入	Ⅲa期	VA	72	51 図	
113	紀伊国	根来寺坊院跡	106.9	85.2	125.46948	441.7	418.3	三石入	Ⅲb期	VB	73	16 図-20	
114			88.2	81.6	108.08824	298.3	262.1	三入	Ⅲa期	VA	74	図 5-77	
115			99.6	82.8	120.28986	391.0	367.5	二石入	Ⅲb期	VB	74	図 13-213	
116			92.0	84.0	109.52381	340.2	325.0	二石入	Ⅲb期	VB	75	図 69-555	
117			92.0	81.6	112.74510	293.6	281.0		Ⅲb期	VB	75	図 78-684	
118			84.0	79.2	106.06061	269.7	249.7	三入	Ⅲa期	VA	76	34 図-162	
119			84.0	78.6	106.87023	242.5	224.0	三石入	Ⅲa期	VA	76	65 図-327	
120			91.2	80.4	113.43284	294.9	286.9	三入	Ⅲa期	VA	76	65 図-328	
121			85.0	76.0	111.84211	261.9	248.7	二石入	Ⅲa期	VA	77	図 6 P-3	
122			88.0	83.0	106.02410	319.6	302.2	二	Ⅲa期	VA	77	図 6 P-4	
123			95.0	80.5	118.01242	304.1	286.7	三入	Ⅲa期	VA	77	図 7 P-6	
124			89.0	79.5	111.94969	271.8	258.4	二石	Ⅲa期	VA	77	図 7 P-7	
125			92.0	75.0	122.66667	251.9	240.8		Ⅲb期	VB	77	図 7 P-8	
126			92.0	85.00	108.23529	310.4	290.5		Ⅲb期	VB	77	30 図-122	
127		鳥居道路	93.4	81.2	115.02463	300.2	282.9		Ⅲa期	VA	78	14 図-92	
128		加茂道路	94.4	80.8	116.83168	295.9	285.6		Ⅲb期	VB	79	36 図-305	
129		本町道路	104.4	91.2	114.47368	465.2	440.4		Ⅲb期	VB	80	80 図-C218	
130	播磨国	姫路城下町道路	100.0	84	119.04762	361.3	336.6		Ⅲb期	VB	81	図 7-21	
131		江井ヶ島長楽寺	96.5	73.0	132.19178	271.1	258.9	二石入	Ⅲb期	VB	資料 調査	—	
132	淡路国	福田片岡遺跡	88.5	90.4	97.89823	355.8	332.8	三入	Ⅲa期	VA	82	挿図 253-2	
133		叶堂城跡	98.4	80.0	123.00000	296.8	280.7		Ⅲb期	V B	83	33 図-89	
134	備前国	片岡田家跡	92.8	80.8	114.85149	296.3	278.8		Ⅲa期	VA	84	114 図	
135		周園茶臼山城	81.0	80.4	100.74627	253.9	231.2	三入	Ⅲa期	VA	85	34 図-91	
136	安芸国	万徳院跡	99.5	81.0	122.83951	341.8	324.7	二石入	Ⅲb期	VB	86	11 図-17	
137	讃岐国	東山崎・水田遺跡	81.0	73.2	110.65574	205.6	196.8		Ⅲa期	VA	20	76 図-95	
138	阿波国	黒谷川宮ノ前遺跡	72.0	58.4	123.28767	119.1	114.9		Ⅲa期	VA	87	284 図-854	
139	伊予国	湯築城	84.4	77.8	108.48329	257.2	238.8		Ⅲa期	VA	23	図 93-400	
140			89.8	79.5	112.95597	288.4	274.6		Ⅲa期	VA	23	図 94-402	
141		ウラショウジ遺跡	84.8	75.2	112.76596	163.5	154.1		Ⅲa期	VA	50	37-067 (1号墓)	

表 5 備前焼大甕集成表 4

番号	地域	道路名	器高 (cm)	胴部 最大径 (cm)	相対的 深さ	全体容量 (L)	頸部容量 (L)	記載 容量	本稿の 時期区分	重根 編年	紀年路	報告書 番号	管理番号
142	その他	岡山県内 紀年路資料	104.7	82.5	126.90909	360.0	337.5	甕石入	Ⅲb 期	VB	1571(元龜 2)年	84	9 図-9
143			95.6	77.0	124.15584	257.3	236.2	甕石入	Ⅲb 期	VB	1582(天正 10)年	84	10 図-10
144			95.5	78.4	121.81122	311.3	293.3	甕石 五斗入	Ⅲb 期	VB	1582(天正 10)年	84	11 図-11
145			98.0	75.7	129.45839	282.8	262.6	二石入	Ⅲb 期	VB	1582(天正 10)年	84	12 図-12
146			92.4	78.0	118.46154	290.7	269.9	甕石入	Ⅲb 期	VB	1583(天正 11)年	84	13 図-13
147			93.5	76.2	122.70341	263.9	244.2	甕石 五斗入	Ⅲb 期	VB	1583(天正 11)年	84	14 図-14
148			104.8	80.4	130.34826	372.3	349.5		Ⅲb 期	VB	1594(文祿 3)年	84	15 図-15
149			104.8	82.4	127.18447	452.7	435.8		Ⅲb 期	VB	1594(文祿 3)年	84	16 図-16
150	豊前国	香月公民館 所蔵資料	104.4	82.8	126.08696	346.3	331.0		Ⅲb 期	VB		88	28 図-281
151	筑紫国	博多道路群	98.0	75.0	130.66667	270.8	254.2		Ⅲa 期	VA		52	Fig19-29
152	摂津国	久宝寺内町道路	101.2	80.8	125.24752	399.9	375.5		Ⅳ期	ⅥA		59	32 図-97
153			100.8	78.8	127.91878	316.0	292.5		Ⅳ期	ⅥA		59	33 図-99
154	和泉国	堺環濠都市道路	97.8	77.4	126.35659	260.0	246.8		Ⅳ期	ⅥA		30	32 図-1
155			75.6	51.6	146.51163	110.5	106.3		Ⅳ期	ⅥA		30	31 図-35
156			76.8	65.1	117.97235	131.5	109.7		Ⅳ期	ⅥA		89	66 図-35
157	播磨国	姫路城下町道路	75.6	58.4	129.45205	131.6	116.6		Ⅳ期	ⅥA		81	11 図-43
158	その他	岡山県内 紀年路資料	105.5	80.5	131.05590	363.5	338.1		Ⅳ期	VIA	1598(慶長 3)年	84	17 図-17
159			105.6	79.0	133.67089	275.0	256.8		Ⅳ期	VIA	1607(慶長 12)年	84	18 図-18
160			100.8	78.6	128.24427	324.6	300.4	甕石入	Ⅳ期	VIA	1610(慶長 15)年	84	19 図-19
161			106.8	81.2	131.52709	350.0	313.4	甕石入	Ⅳ期	VIA	1613(慶長 18)年	84	20 図-20
162			96.4	67.2	143.45238	189.0	168.5		Ⅳ期	VIA	1619(元和 5)年	84	21 図-21
163			83.2	50.5	164.75248	111.8	103.2		Ⅳ期	VIA	1624(寛永 元)年	84	22 図-22

※集成表の「引用番号」は報告書一覧の番号に対応する。編年は重根 2014 を参考にした。

また、本稿における陶器製大甕の容量は「Simple Digitizer」を用いた座標読み取り²⁾を行い、そこで計測した座標を予め計算式を設定した Excel ファイルに読み込むことで容量を算出する。資料の計測位置は頸部水面時の容量(頸部容量)と口縁端面水面時の容量(全体容量)である(図 1)。

その他、本稿では陶器製大甕の容量以外に、器高と胴部最大径の計測を行い、そこで得られた器高と胴部最大径の計測成果をもとに相対的深さ²⁾を算出した。

3. 備前焼大甕の器形と容量の分析

(1) 備前焼大甕の容量分布と分類

まず、本稿を執筆するにあたって集成した 163 点の

備前焼大甕について、大甕の頸部容量に基づいて分類を行う。

集成した備前焼大甕の頸部容量を昇順に並べたものが図 2 である。ここから、備前焼大甕が 100 ℓ 以下から 400 ℓ 以上という幅広い容量分布を有していることがわかる。また、容量分布を詳しく観察すると、頸部容量が 170 ～ 195 ℓ の大甕を確認することができず、この空白範囲から備前焼大甕の容量分布は大きく 2 つのグループに分類できる。本稿ではこの容量分布から、頸部容量 195.0 ℓ 以下のものを 1 類、195.1 ℓ 以上のものを 2 類として分類する。

(2) 各時期における器形と容量の様相

次に、各時期における備前焼大甕の器形と容量の特徴を整理し、その変遷過程をまとめる(図3)。

I期の備前焼大甕は器高75.0cmを境にして1類・2類に区分することができ、その多くが器高80cm代、容量200ℓ代の大甕である。相対的深さは1類が105～130の範囲に、2類が100～120の範囲に大半が分布する。

II期の備前焼大甕は46点のうち26点が1類であり、1類の占める割合が全時期の中で最も高い。1類は器高が60～75cm、容量が100～150ℓ代に分布するものが大半であり、2類は器高が80～95cmで容量が250～300ℓの範囲に分布するものが多く確認できる。相対的深さは1類が105～125、2類が105～115の範囲に多く分布することから、1類が長胴型、2類が

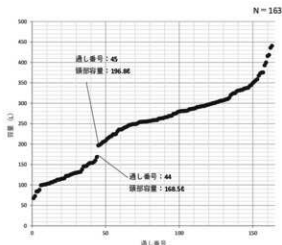
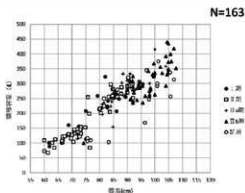
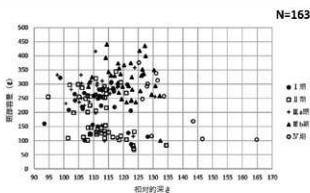


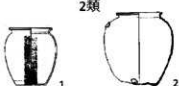
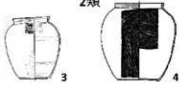
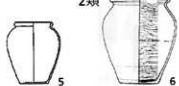
図2 備前焼大甕の頸部容量の分布



1-器高と頸部容量の分布



2-相対的深さと頸部容量の分布

I期	1類 2類  1 2	2類  7 8
II期	1類 2類  3 4	1類 2類  9 10
IIIa期	1類 2類  5 6	S=1/40 1.久田・堀ノ内遺跡(13) 2.草戸千軒町遺跡(21) 3.大村遺跡(48) 4.長門国府(58) 5.堺環濠都市遺跡(98) 6.片口印地家(134) 7.江井ヶ島長楽寺(131) 8.堺環濠都市遺跡(100) 9.並松町遺跡(156) 10.岡山県内紀年銘資料(161) ※遺跡名の後に記載した括弧付きの番号は集成表の「番号」に対応する。尚、出典については報告書一覧・集成表の「引用番号」、「管理番号」を参照されたい。

3-備前焼大甕の器形と容量の変遷

図3 各時期における備前焼大甕の器形と容量の様相と変遷過程

寸胴型であるといえる。

Ⅲ期の備前焼大甕はⅢa期・Ⅲb期ともに器高80 cm以上、容量200ℓ以上の2類に分類されるものがほとんどである。Ⅲa期の2類大甕は、器高80～95 cm、容量220～320ℓの範囲に分布するものが大半であり、相対的深さが105～120の範囲に分布するものが多く確認できる。Ⅲb期2類大甕は器高がすべて90 cm以上であり、105 cmをこえるものも確認できる。容量は230～380ℓの範囲に分布し、相対的深さは115～130の範囲に分布するものが多い。Ⅲa期とⅢb期を比較すると、前者は器高・容量が巨大化しつつもⅡ期と似たような器形特徴を有し、後者はⅢa期と比較してさらに器高・容量が大型化すると同時に、長胴化の傾向を強めたといえる。

Ⅳ期の備前焼大甕は資料数が少ないが、12点中5点が1類であり、1類の占める割合が高い。1類は器高が75～80 cm、容量が100～120ℓの範囲に分布の集中がみられるが、器高が95 cm・容量160ℓ代のものも確認できる。相対的深さは115～165の範囲に点在し、全体的に長胴型である。2類については器高が95 cm以上、容量が250前後～350ℓの範囲に分布するものが多く、相対的深さは125～135の範囲に多くが分布することから、Ⅲb期2類資料と器高と容量の特徴が共通し、やや長胴化の傾向を強めたといえる。

以上のことから、備前焼の器形と容量は1類と2類で器形と容量が大きく異なることが確認できる。そして、全ての時代に普遍的に確認できる2類については、Ⅰ期からⅣ期にかけて器高の大型化に伴う連続的な頭部容量の増加と長胴化の傾向が確認される。特にⅢb期については、これまでの時代と比較して器形と容量の急激な変化が顕著に現れる。

4. 内容量記載資料の分析

(1) 内容量記載資料の年代と資料の特徴

本節では、内容量が記載された備前焼大甕について、内容量未記載資料と比較し、その資料の特徴を示す。

最初に、内容量記載資料の容量記載形式と年代について述べる。内容量を示す線刻が施された大甕はⅢa期、Ⅲb期、Ⅳ期で確認される。確認された大甕の線刻は「三石入を示すもの」「二石入を示すもの」「二石五斗入を示すもの」の3種類である。

「三石入を示すもの（三石入り大甕⁶⁾）」として分類される資料の表示形式は「三入」と「三石入」の2種類があげられる。「三入」の線刻はⅢa期にのみ確認できる。「三石入」の線刻はⅢa・Ⅲb期の両方で確認

でき、特にⅢb期に多く確認される。

「二石入を示すもの（二石入り大甕）」として分類される資料の表示形式は「二入」と「二石入」の2種類があげられる。「二入」の線刻は1点のみであるがⅢa期に該当するものが確認でき、「二石入」の線刻はⅢa期からⅣ期の広い時代で確認できた。

「二石五斗入を示すもの（二石五斗入り大甕）」についてはわずか2点であるが、Ⅲb期にのみ確認できた。この2点の資料はそれぞれ1582（天正10）年・1583（天正11）年の紀年銘が施されたものであり、資料数と線刻の特徴により、特注品のようなイレギュラーなものとして製作された可能性が高い。

以上のことから、備前焼大甕の容量表示形式の年代観をまとめると、内容量が記載された備前焼大甕はⅢa期、すなわち16世紀前半に出現し、「〇入」・「〇石入」の2種類の表示形式が認められる。「〇入」の表示形式はⅢa期に多くみられ、Ⅲb期には確認できないことから、16世紀前半の年代が与えられる。一方、「〇石入」の表示形式はⅢa期からⅣ期まで確認でき、明確な年代を与えることは難しいが、Ⅲb期以降の表示形式が全てこれになることから、「〇石入」の表示形式は「〇入」と比較して新しいものであると判断できる。さらに、線刻の表示については、三石入り大甕がⅢb期を最後に確認されなくなり、三石入り大甕は16世紀後半に途絶えたと考えられる。

次に、内容量記載資料と未記載資料の容量を比較する。図4は各時期における内容量記載資料と未記載資料の頭部容量の分布を比較したものである。内容量記載資料は表示容量に関わらず、すべて195ℓ以上の2類に該当する。同じ2類の内容量未記載資料と頭部容量を比較すると、Ⅲb期の三石入り大甕を除くほとんどの内容量記載資料の頭部容量が内容量未記載資料と同じ範囲に分布することから、内容量記載資料は備前

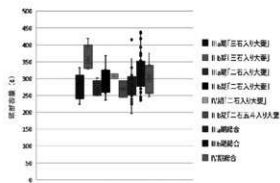


図4 内容量記載資料の分布

焼大甕の中で特別大きな製品でないと。また、内容量記載資料は未記載のものと比較して、頭部容量のパラッキが少ないことも確認でき、内容量記載資料が何らかの基準に基づいて製作されたと思える。

上記のことから、備前焼大甕の内容量記載資料の資料の特徴をまとめると、内容量記載資料は備前焼大甕全体では最大級の容量を有するものであるといえないが、頭部容量のパラッキが少ない、規格性を有する資料である。そして、内容量の表示形式に時代的特徴があり、容量を示す線刻から大まかな年代が与えられる。

(2) 内容量の分析

本節では、内容量記載資料の容量を分析する。

最初に、内容量記載資料の頭部容量の比較をとおして、各時期の表示形式の示す容量について分析する。

第一に、先に示した図4の箱ひげ図の四分位範囲の分布から、内容量記載資料の表示形式は同時期の大甕に限り原則、三石入りの大甕が二石入りのものより頭部容量が大きく、「三石 > 二石」の大小関係が成立していることが読み取れる。これは、三石入り・二石入りを示す線刻が両方確認できるⅢa・Ⅲb期で見られる関係である。しかし、二石五斗入りの大甕については、同時期であるⅢb期の二石入り大甕の中央値よりも低い位置に四分位範囲が分布することから、表示形式の大小関係が成立しない。これは二石五斗入り大甕の資料数の問題もあるが、同時代の内容量未記載資料と比較しても容量が少ないことから、二石五斗入り大甕が特殊な大きさを有するものである可能性が高い。二石五斗入り大甕の容量の特殊性に関する議論は今後の資料の蓄積に期待したい。

また、表示形式に注目すると、三石入り大甕・二石入り大甕の頭部容量は時代を下るにつれて増加が続けていることがわかる。特にⅢa期からⅢb期にかけての三石入り大甕の変化は顕著であり、中央値が約60ℓも増加している。それと同時に、Ⅲb期については三石入り大甕と二石入り大甕の容量の違いがより明確に表れているといえる。

次に、各時期の内容量記載資料について、表示形式に基づいて頭部容量を割り算し、線刻に示された容量の示す一石を分析する。

図5は各時期における内容記載資料の頭部容量を線刻の示す容量に基づいて算出した一石の分布をまとめたものである。まず、図5から読み取れる各表示形式の容量の様相を紹介する。

三石入り大甕については、Ⅲa期資料が示す一石が

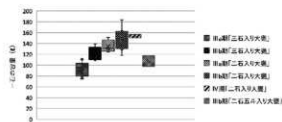


図5 線刻の示す一石の分布

75～120ℓであり、特に90.0ℓ以下、95.1～105.0ℓ付近に分布が集中している。Ⅲb期資料が示す一石は110～140ℓであり、特に105.1～120.0ℓ、130.1～140.0ℓの範囲に分布が集中する。

二石入り大甕については、Ⅲa期資料が示す一石が90～150ℓであり、特に120.1～135.0ℓの範囲に分布が集中する。Ⅲb期資料の一石は、120～185ℓであり、特に125.1～135.0ℓ、161.0～165.0ℓの範囲に分布が集中する。Ⅳ期資料については2点のみであるが、それぞれが示す一石は150.2ℓ・156.7ℓである。

二石五斗入り大甕については、Ⅲb期に該当する2点の一石が、それぞれ97.7ℓ・117.3ℓとなっている。

この内容量記載資料の一石を算出した結果、備前焼大甕の線刻に示された一石の値は、現在の一石（約180ℓ）と比較して小さいものが多い。このことから、備前焼大甕の線刻が示す一石は現在の一石と異なるものであるといえる。また、線刻が示す一石の分析から、備前焼大甕の容量に関する特徴が2点あげられる。

1 目の特徴は、それぞれの線刻が示す一石の値が時代を下るにつれて大きくなることである。これは先に示したとおり、時代を下るにつれて頭部容量が増加することに起因するものである。

2 目の特徴は、容量表示形式によって一石の値が異なることである。先に示した通り、二石入り大甕の示す一石は、全時代をとおして三石入り・二石五斗入りよりも大きい。このことから、それぞれの線刻で示された容量が共通の基準を有していないといえる。

以上が、内容量記載資料の容量に関する分析である。容量の分析から16世紀前半から17世紀前半の限られた時代の様相であるが、備前焼大甕の頭部容量や一石の値が変化していることなど、内容量記載資料の特徴を明らかにすることができた。特に、備前焼大甕の線刻が示す一石の値が現代の一石と比べて小さいという特徴は、備前焼大甕の容量が中世の基準に基づくことを端的に示し、容量理解への認識を改める必要を示すものとなるだろう。

5. 備前焼大甕の容量に関する考察と予察

(1) 備前焼大甕の器形と容量の変遷

第3章では、各時期における備前焼大甕の器形と容量の特徴を分析した。ここではその成果のうち、全時期で多く確認することができた2類に該当する備前焼大甕を中心に器形と容量の変遷をまとめる。

2類についてはⅠ～Ⅲb期で連続的に頸部容量が増加し、特にⅢb期の増加の幅が大きい。それに伴い、2類の器形は器高・相対的深さは高くなる。器高・相対的深さの変化を整理すると、Ⅰ～Ⅲa期はほとんど変化が確認されず、Ⅲb期では器高・相対的深さの両方が急激に高くなるという変化が確認できる。また、Ⅳ期については、器高・相対的深さがさらに高くなり、頸部容量にバラツキが確認される。このことから、緩やかな容量の変化の中で寸胴型の器形を維持する「Ⅰ～Ⅲa期」と、容量の急激な増加の中で長胴型の器形に変化した「Ⅲb期」、器高・相対的深さがさらに高くなり容量分布にばらつきが生じる「Ⅳ期」というように、備前焼大甕の器形・容量の変遷の特徴は3つの時期に分けられる。

一方、1類に該当する備前焼大甕については、各時期の資料数に大きな差がみられるため、本稿ではⅠ・Ⅱ期の器形の特徴の紹介にとどめる。Ⅰ・Ⅱ期のものについては相対系深さが2類のものと比較して大きいことから、やや長胴型の器形を有するといった特徴がある。2類と比較して特にⅢa期以降は資料数が著しく少なくなるため、1類の備前焼大甕の分析は今後の資料の蓄積に期待したい。

(2) 内容量記載資料の変遷とその要因

第4章で行った内容量記載資料の分析では、16世紀前半から17世紀前半にかけての内容量を示す線刻が施された備前焼大甕の特徴を示した。それらを基に備前焼大甕の内容量記載資料の変遷過程とその要因を考察する。

まず、内容量記載資料の変遷過程についてであるが、備前焼大甕の内容量記載資料の変遷過程はⅢa期とⅢb期以降の2つの時代に区分できる。

第一に、内容量記載資料が出現する16世紀前半に該当するのがⅢa期である。この時期の内容量を示す線刻の表示形式は「〇入」「〇石入」と表記されるもののうち、特に「三入」と表記されるものが多い。当該期の内容量記載資料は16点集成しているが、そのうち12点が「三入・三石入」と表記された線刻を有する三石入り大甕であることから、この時代は「三石

入り大甕の時代」とであるといえる。

そして、この内容量記載資料に転換期が訪れるのが16世紀後半、すなわちⅢb期である。この時期の内容量を示す線刻の表示形式は「〇石入」と表記されるものに限定され、「〇入」と表記されるものは確認できなくなる。さらに、二石五斗入り大甕を除く内容量記載資料15点のうち9点が「二石入」と表記された二石入り大甕であり、二石入り大甕が三石入り大甕の数を上回る。これは、三石入り大甕の紀年銘資料が1571(元亀2)年以降に確認できないことから、Ⅲb期中に三石入り大甕が姿を消すことを示しているといえるだろう。このことから、Ⅲb期は「二石入り大甕の時代」といえる。そして、17世紀前半に該当するⅣ期についても二石入り大甕が確認されることから、Ⅳ期はⅢb期の延長であると捉えられる。

このように、備前焼大甕の内容量記載資料の変遷過程を示した結果、16世紀後半、すなわちⅢb期に転換期を迎え、この時期を境に表示形式など、その様相を大きく変化させていることがわかる。このⅢb期という時期は表示形式だけでなく、二石入り・三石入り大甕の頸部容量の差の拡大、内容量記載資料の容量が増加による線刻が示す一石の値の増加といった容量の変化だけでなく、先に示したように器形の変化も確認することができる。

このようなⅢb期に確認される変化から、筆者は16世紀後半に備前焼大甕の大規模な品質改良が起こったと考察する。Ⅲb期の三石入り大甕・二石入り大甕がⅢa期のものと比較して頸部容量の差が大きくなったこと、一石のバラツキが小さくなったことは備前焼大甕の容量表示の正確さを保証するための変化であったと捉えられる。また、Ⅲb期の備前焼大甕の線刻に注目すると、容量の表示形式が「〇入」という表記から「〇石入」と変化していることをはじめ、「捻り土」という品質の良い土で製作された製品であることを示す線刻が施された大甕も増加することから、備前焼大甕の作りもⅢb期と比較して丁寧になっていることがわかる。以上の点から、Ⅲb期に確認される備前焼大甕の内容量記載資料の変化は、16世紀後半の品質改良による表示容量の正確さの保証・胎土といった様々な要素の高品質化をもたらし、それが器形の変化にも影響を与えたと考えられる。そして、この品質改良の背景には、他産地との差別化や桶・樽といった木製貯蔵具の普及による競争(伊藤・西1977、藤原2000)が主な要因としてあげられる。備前焼大甕の内容量記載資料の変遷過程は、備前焼大甕が他産地の大甕や

桶・樽に対抗し、大甕が衰退する時代に生き残りをかけ、生存戦略を模索した様子を反映しているだろう。

また、備前焼大甕の容量記載資料の変遷過程で、三石入り大甕の衰退や一石の値の増加を説明したが、それらについては次節で予察する。

（3）備前焼大甕の容量と枡に関する予察

Ⅲ a 期からⅢ b 期にかけて、内容量記載資料の線刻の示す一石の値が大きくなることから、備前焼大甕が容量の基準とする枡（容量基準枡）が大型化したことが考えられる。これにより、備前焼大甕の頭部容量の増加は容量基準枡の大型化によるものであると説明できる。

この容量基準枡の大型化については、三石入り大甕の衰退の要因として説明できると筆者は考える。容量基準枡の大型化は必然的に頭部容量の大型化をもたらす。さらに、前節で述べた、Ⅲ b 期の品質改良の動きから、二石入り大甕と三石入り大甕の頭部容量の差がより顕著に現れ、Ⅲ b 期の三石入り大甕の容量はこれまでの時代と比較して格段に大きくなる。そして、巨大化した三石入り大甕は、大甕の大きさの限界を迎え、二石入り大甕の容量表示の保証のために姿を消し、結果二石入り大甕のみが継続的に製作されることになったというのが筆者の見解である。この見解については白井氏も永禄期の三石入り大甕と慶長年間の二石入り大甕の容量が近似する要因を枡制の変革であると捉え（白井 1984）、「京枡を採用したいわゆる三石甕は二石甕と呼ばなければならない（白井 1984 67 頁）」と指摘している。このようにして、備前焼大甕の容量基準枡の変化が結果的に三石入り大甕の衰退の要因となったと結論付けることができるだろう。

では、この容量基準枡を変化させた枡は何であったのだろうか。最後に内容量記載資料の容量基準枡について予察する。

先述の引用のとおり、白井氏は備前焼大甕の容量表記が変化する要因を京枡によるものであると結論づけた。しかし、今回容量を分析した大甕のうち、一石の容量が 180 ℓ に達したものはわずか 1 点にすぎず、備前焼大甕の容量基準枡に京枡が採用された可能性は低いといえる。

さらに、三石入り大甕・二石入り大甕は一石の大きさが異なることから容量基準枡の大きさは異なることが推察される。これらを踏まえて本稿では、それぞれの容量基準枡について検討する。

まず、三石入り大甕の一石の容量は、Ⅲ a 期の平均

が 93.41 ℓ、Ⅲ b 期のものが平均 120.11 ℓ であり、現代の枡と比較して、それぞれ 0.52 倍・0.66 倍の容量である。この一石の容量を水島川和夫氏が算出した中世枡の容量（水島川 2010）と比較すると前者は宜宣斗（現代枡の 0.574 倍の大きさ、一石 = 103.32 ℓ）と近い値を得ることができるが、容量が 10 ℓ 近く異なるため、完全に合致するとは言い難い。後者については、該当するような枡を発見することができなかった。

次に、二石入り大甕の一石の容量については、Ⅲ a 期の平均が 134.43 ℓ、Ⅲ b 期の平均が 146.97 ℓ、Ⅳ期の平均が 153.45 ℓ であり、現在の一石との容量比はⅢ a 期が 0.75 倍、Ⅲ b 期が 0.817 倍、Ⅳ期が 0.853 倍となる。これらの一石の容量については、Ⅲ a 期・Ⅲ b 期の一石の容量が、水島川氏が算出した亮升の容量（現代枡の 0.776 倍の大きさ、一石 = 139.68 ℓ）に近い値となる（水島川 2011）。Ⅳ期の一石の容量については、水島川氏の算出した亮升の容量のほか、讃岐斗（現代枡の 0.924 倍の大きさ、一石 = 166.32 ℓ）の容量に近い値となる（水島川 2011）。ここであげた亮升・讃岐斗は、中世後期から近世初頭にかけて西日本で標準的に使用された商業枡である（水島川 2011・2012）。

以上が、備前焼大甕の容量基準枡についての予察である。備前焼大甕の容量基準枡の同定はまだ議論の余地があるが、Ⅲ a・Ⅲ b 期の二石入り大甕の容量基準枡に亮升が採用されていた可能性がある指摘できるだろう。特に、Ⅲ a 期からⅢ b 期にかけては二石入り大甕の一石が亮升の値を超えるように変化していることから、Ⅲ b 期の品質改良の中で表示容量の正確さの保証が求められ、亮升の値を満たすように容量が変化したと捉えることもできる。また、容量基準枡の特定が困難であったⅢ b 期の三石入り大甕についても、できる限り亮升の容量に近づけようとした可能性があったことも推測できる。これらのことから、備前焼大甕の容量基準枡は西日本の広域で使われた亮升であったと予察でき、16 世紀後半の品質改良の動きは、亮升をもとにした規格の徹底を目的としたものであったと推察できる。備前焼大甕の容量は、中世後期の西日本広域で使用圏を確立した商業枡と関連する可能性があり、西日本の中世社会と連動するものであったといえるだろう。

おわりに

ここまで、備前焼大甕の容量について内容量記載資料を中心に分析し、考察を行った。中世全体の備前焼大甕の器形と容量の変遷については、各時期の分析資

料数の偏りという課題があるものの、器高・相対的深さ・容量の大きな中世全体の流れを示すことができた。今後、本稿で示した備前焼大甕の変遷過程は、資料の蓄積によってより詳細に示すことができるだろう。さらに、本稿では触れなかったが、使用痕分析など大甕の用途に関する時期的特徴を示すことができれば、大甕の容量の変遷を機能的要因と関連付けて示すことができるようになると思われる。

また、容量の分析については、備前焼大甕の容量記載資料を中心に、それらの年代観を示し、容量の変遷過程とその要因について考察した。そして、その背景には16世紀後半の品質改良や西日本の広域で使用圏を形成した商業網が容量基準枠として採用されていた可能性があると予察したが、資料数の問題や柄に関する議論など課題も多い。今後議論を進めていく必要がある。

このように本稿では備前焼大甕の容量に焦点をあてた分析を行ってきた。備前焼大甕の容量は製品の変遷や柄の変化を検討するうえで、有効な情報を内包していることと示すことができる。備前焼大甕の容量に関するデータは、その他様々な情報と組み合わせることで、中世社会の様相を明らかにする手段の一つとして活用が期待される。

謝辞

本論は2022(令和4)年度、立命館大学文学部に提出した卒業論文を改変したものである。作成にあたり、木立雅明先生・京都市立芸術大学の畑中英二先生から様々なご指導・助言をいただきました。心より感謝申し上げます。

注

- 1) これまで内容量を示す備前焼大甕のうち、最も大きな容量を示す線刻は「三石九斗入」が確認されている(桂1989)。
- 2) Simple Digitizerは藤巻晴行氏作成の画像数値化ソフトであり、画像の座標測定などに活用できる。また、ソフトで取得した座標データはCSV形式で保存される(宮内2017)。また本稿で扱う容量計測の方法は宮内2017の方法に従う。ただ、容量を算出するためのExcelファイルについては大甕の容量算出の正確性を確保することを目的に自作したものを使用した。
- 3) 相対的深さは器高/胴部最大径×100で算出される。値が小さいほど資料が寸胴体型になり、値が

大きいほど長胴体型となる(波辺2010)。

- 4) 本稿で扱う「〇石入り大甕」という容量+入り大甕という表記は、線刻によって容量が明らかになっている内容量記載資料を容量別に分類した総称であり、実際にこのような線刻が施されたものは確認されない。大甕の内容量に関する用語としては「一石甕・二石甕・三石甕」が存在するが、これらの用語は大甕を大中小で区分するような、大きさを示す意味合いが強い。本稿では内容量記載資料の容量分類の表記を全て「〇石入り大甕」とする。

参考文献

- 石岡ひとみ 2010 「四国出土の中世備前焼」備前市教育委員会生涯学習課編『備前市歴史民俗資料館紀要11:備前歴史フォーラム資料集 鎌倉・室町 BIZEN』備前市教育委員会生涯学習課13-28頁
- 伊藤晃 2008 「中世備前焼の全国制覇」山陰中世土器検討会編『第七回山陰中世土器検討会資料集』山陰中世土器検討会
- 伊藤晃・上西節雄編 1977 『日本陶磁全集(10) 備前』中央公論社
- 上西節雄 2001 「備前焼紀年銘資料の諸問題」国立歴史民俗博物館編『国立歴史民俗博物館研究報告第89集』国立歴史民俗博物館653-669頁
- 上西節雄 2002 「差別ガイド日本のやきもの 備前」淡交社
- 白井洋輔 1984 「備前焼紀年銘入大甕の時代的特徴」岡山県立博物館編『研究報告5』岡山県立博物館49-76頁
- 桂又三郎 1989 「備前 日本陶磁大系10」平凡社
- 堺市教育委員会 1984 『堺市文化財調査報告20:堺環濠都市道跡発掘調査報告:宿院町東4丁 SKT14 地点・調御寺跡 市之町東4丁 SKT19 地点 市之町西3丁 SKT20 地点 車之町東1丁 SKT21 地点』堺市教育委員会
- 重根弘和 2003 「中世備前焼に関する考察」近藤喬一先生退官記念事業会編『山口大学考古学論集:近藤喬一先生退官記念論文集』近藤喬一先生退官記念事業会309-320頁
- 重根弘和 2014 「中世備前焼の分類と分布」佐々木達夫編『中近世陶磁器の考古学 第四巻』雄山閣9-28頁
- 重根弘和 2022 「備前」日本中世土器研究会編『新版概説中世の土器・陶磁器』新曜社249-264頁
- 高瀬一嘉 2021 「土器容量の算出について」フリーソ

フトを利用した方法と有効性」『兵庫県立考古博物館研究紀要第14号』205-212頁

乗岡実 2001「備前焼大甕編年レクチャー資料」『関西近世考古学研究』9 関西近世考古学研究会 104-116頁

乗岡実 2010「15世紀から17世紀初頭の備前焼を消費した遺跡」備前市教育委員会生涯学習課編『備前市歴史民俗資料館紀要11：備前歴史フォーラム資料集 鎌倉・室町 BIZEN』備前市教育委員会生涯学習課 125-142頁

藤原里香 2000「壺・甕から結物へ」小泉和子編『桶と樽 脇役の日本史』法政大学出版局 73-97頁

宝月圭吾 1961『中世量制史の研究』吉川弘文館

間壁忠彦 1990『備前焼』ニューサイエンス社

水島川和男 2010「中世畿内における使用升の容積と標準升」社会経済史学会編『社会経済史学 75-6』社会経済史学会 585-606頁

水島川和男 2011「中世西日本における使用升の容積と標準升」社会経済史学会編『社会経済史学 76-4』社会経済史学会 525-545頁

水島川和夫 2012「中世東日本における使用升の容積と標準升」社会経済史学会編『社会経済史学 78-1』社会経済史学会 99-118頁

水ノ子岩学術調査団 1978『海底の古備前』山陽新聞社

宮内信夫 2017『Simple Digitizer を利用した容量測定方法について』(マニュアル)

渡部裕司 2010「山形盆地における古墳時代前期土師器の計測—容量と形態の特徴について—」山形県埋蔵文化財センター編『年報』山形県埋蔵文化財センター 50-57頁

報告書一覧

各報告書に付与された番号は表2・3に掲載した引用番号と一致する。

1. 宇治市教育委員会 1985『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報8：宇治市街道跡第2次発掘調査概報』宇治市教育委員会
2. 京都市埋蔵文化財研究所 2005『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2005-8：平安京左京六条三坊五町跡』京都市埋蔵文化財研究所
3. 京都市埋蔵文化財研究所 2010『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010-6：平安京左京八条三坊九町跡』京都市埋蔵文化財研究所
4. 京都市埋蔵文化財研究所 2014『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2013-16：平安京左京八条

一坊十六町跡』京都市埋蔵文化財研究所

5. 大阪市博物館協会大阪文化財研究所 2012『大坂城跡14』大阪市博物館協会大阪文化財研究所
6. 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2004『兵庫県文化財調査報告270：兵庫津遺跡2（浜崎・七宮地区の調査）』兵庫県教育委員会
7. 神戸市教育委員会 2012『兵庫津遺跡第53次発掘調査報告書』神戸市教育委員会文化財課
8. 上西節雄 2001『備前焼紀年銘資料の諸問題』国立歴史民俗博物館編『国立歴史民俗博物館研究報告第89集』国立歴史民俗博物館 pp. 653-669
9. 兵庫県立考古博物館 2010『兵庫県文化財調査報告380：大野遺跡発掘調査報告書』兵庫県教育委員会
10. 加西市教育委員会 1999『加西市埋蔵文化財調査報告37：南上山遺跡』加西市教育委員会
11. 岡山県古代吉備文化財センター 2005『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告192：久田堀ノ内遺跡2』岡山県教育委員会
12. 岡山県教育委員会 1980『岡山県埋蔵文化財報告10：岡山県埋蔵文化財報告』岡山県教育委員会
13. 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1977『広島県草戸千軒町遺跡調査研究所年報1976：草戸千軒町遺跡第18～20次』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
14. 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1979『広島県草戸千軒町遺跡調査研究所年報1977：草戸千軒町遺跡第21～23次』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
15. 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1987『広島県草戸千軒町遺跡調査研究所年報：草戸千軒町遺跡』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
16. 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1980『広島県草戸千軒町遺跡調査研究所年報1978：草戸千軒町遺跡第24～26次』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
17. 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1981『広島県草戸千軒町遺跡調査研究所年報1979：草戸千軒町遺跡第27次』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
18. 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1983『広島県草戸千軒町遺跡調査研究所年報1981：草戸千軒町遺跡第30次』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
19. 広島県埋蔵文化財調査センター 1990『広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書84：山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(5)』広島

- 島県埋蔵文化財調査センター
20. 香川県埋蔵文化財調査センター1992『東山崎・水田遺跡 1』香川県教育委員会
 21. 徳島県埋蔵文化財センター2009『徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 74：末石遺跡 中庄東遺跡 2』徳島県教育委員会・徳島県埋蔵文化財センター
 22. 高知県文化財団埋蔵文化財センター2008『高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 103：坂本遺跡 14』高知県文化財団埋蔵文化財センター
 23. 愛媛県埋蔵文化財調査センター2002『埋蔵文化財発掘調査報告書 100：湯築城跡』愛媛県埋蔵文化財調査センター
 24. 福岡市教育委員会 1992『福岡市埋蔵文化財調査報告書 281：博多 26』福岡市教育委員会
 25. イビソク関西支店 2017『イビソク京都市内遺跡調査報告 14：山科本願寺跡・左義長町遺跡』イビソク関西支店
 26. 京都市埋蔵文化財研究所 1997『京都市埋蔵文化財研究所調査報告 14：京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所
 27. 兵庫県立考古博物館 2010『兵庫県文化財調査報告 369：南辻遺跡』兵庫県教育委員会
 28. 堺市教育委員会 1989『堺市文化財調査報告 41：堺環濠都市遺跡発掘調査報告 大町東 1丁 SKT 112 地点』堺市教育委員会
 29. 堺市立埋蔵文化財センター2002『堺市文化財調査概要報告 98：堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告 SKT787 地点・熊野町東 2丁』堺市教育委員会
 30. 堺市教育委員会生涯学習部文化財課 2008『堺市埋蔵文化財調査概要報告 117：堺環濠都市遺跡 (SKT929) 発掘調査概要報告』堺市教育委員会
 31. 和歌山県文化財センター2004『藤倉城跡・川関遺跡』和歌山県文化財センター
 32. 河内長野市遺跡調査会 1997『河内長野市遺跡調査会報 16：天野山金剛寺遺跡』河内長野市遺跡調査会
 33. 西安田長野遺跡調査委員会 1999『中町文化財報告 18-1：円満寺東の谷遺跡』西安田長野遺跡調査委員会他
 34. 兵庫県立考古博物館 2012『兵庫県文化財調査報告 414：たつの市御津町 室津四丁目遺跡』兵庫県教育委員会
 35. 岡山市教育委員会 1998『すくも山遺跡』岡山市教育委員会
 36. 岡山県教育委員会文化課 1981『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 46：百間川沢田遺跡 1：百間川長谷遺跡：百間川岩間遺跡：百間川当麻遺跡 12』建設省岡山河川工事事務所
 37. 岡山県古代吉備文化財センター1996『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 113：宮地遺跡 大木遺跡 大木古墳群 粧田山城跡 大村遺跡 3』岡山県教育委員会
 38. 岡山県古代吉備文化財センター1988『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 71：本州四国連絡橋上ルート建設に伴う発掘調査 2』岡山県教育委員会
 39. 尾道市教育委員会 1980『尾道 1979』尾道市教育委員会
 40. 広島県埋蔵文化財調査センター1999『広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書 185：廿日町屋跡』広島県埋蔵文化財調査センター
 41. 広島県埋蔵文化財調査センター1983『広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書 19：山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (1)』広島県埋蔵文化財調査センター
 42. 間壁忠彦 1990『備前焼』ニューサイエンス社
 43. 山口県埋蔵文化財センター1994『山口県埋蔵文化財調査報告 164：庵河内遺跡 上の山古墳群』山口県教育委員会
 44. 下関市教育委員会社会教育課 1979『長門国府』下関市教育委員会
 45. 高松市教育委員会 2000『高松市埋蔵文化財調査報告 46：香西南西打道跡』高松市教育委員会
 46. 徳島県埋蔵文化財センター2009『徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 74：末石遺跡 中庄東遺跡 2』徳島県教育委員会・徳島県埋蔵文化財センター
 47. 高知県教育委員会 1986『田村遺跡群 第 9 分冊：本文 9』高知県教育委員会
 48. 高知県文化財団 埋蔵文化財センター2014『高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 140：弘人屋敷跡』高知県文化財団埋蔵文化財センター
 49. 愛媛県埋蔵文化財調査センター1985『道後今市遺跡昭和 60 年度 本文編』愛媛県教育委員会
 50. 中世資料集成研究会編 2005『中世資料集成 四国編』中世資料集成研究会
 51. 水ノ子岩学術調査団 1978『海底の古備前』山陽新聞社
 52. 福岡市教育委員会 2020『福岡市埋蔵文化財調査報告書 1396：博多 167』福岡市教育委員会
 53. 京都市埋蔵文化財研究所 1999『京都市埋蔵文化財調査概要 平成 9 年度』京都市埋蔵文化財研究所

54. 京都府埋蔵文化財調査研究センター1995『京都府遺跡調査概要63：平安京跡左京一条二坊十四町（左賦・因賦司）発掘調査概要』京都府埋蔵文化財調査研究センター
55. 四門西日本・中部支社京都支店 2019『平安京左京四条四坊三町跡』四門西日本・中部支社京都支店
56. 文化財サービス 2021『文化財サービス発掘調査報告書 第20集：平安京左京四条四坊一町跡・烏丸御池遺跡発掘調査報告書』文化財サービス
57. 神戸市教育委員会 2001『兵庫県指定有形民俗文化財沢の鶴大石蔵発掘調査報告書』神戸市教育委員会
58. 神戸市教育委員会 2004『御影郷波がえし蔵』神戸市教育委員会文化財課
59. 八尾市文化財調査研究会 2005『財団法人八尾市文化財調査研究会報告80：八尾市文化財調査研究会報告80』財団法人八尾市文化財調査研究会
60. 大阪府文化財調査研究センター2002『財団法人大阪府文化財調査研究センター調査報告書71：津田城遺跡』大阪府文化財調査研究センター
61. 大阪市教育委員会 1984『昭和57年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』大阪市教育委員会他
62. 大阪市教育委員会他 2019『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書（2017）第1分冊』大阪市教育委員会
63. 神戸市教育委員会 2010『兵庫津遺跡発掘調査報告書1』神戸市教育委員会文化財課
64. 堺市教育委員会 1982『堺市文化財調査報告10：東上野芝遺跡発掘調査報告 堺環濠都市遺跡発掘調査報告 新金岡更池遺跡発掘調査報告—第4次調査 鈴の宮遺跡発掘調査報告—第5地区』堺市教育委員会
65. 堺市教育委員会 1984『堺市文化財調査報告20：堺環濠都市遺跡発掘調査報告：宿院町東4丁SKT14地点・調御寺跡 市之町東4丁SKT19地点 市之町西3丁SKT20地点 車之町東1丁SKT21地点』堺市教育委員会
66. 堺市教育委員会生涯学習部埋蔵文化財センター 1987『堺市文化財調査報告35：堺市文化財調査報告35』堺市教育委員会
67. 堺市立埋蔵文化財センター1997『堺市文化財調査概要報告61：堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告SKT78地点・銭鋳型出土地点の調査 堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告 SKT380地点・熊野町西1丁 石原町2丁遺跡発掘調査概要報告IH2-1地点』堺市教育委員会
68. 堺市博物館編 2012『堺出土の茶陶 備前焼』堺市博物館
69. 堺市教育委員会 1990『堺市文化財調査概要報告4：堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告 市之町東4丁 SKT212地点 堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告 南旅籠町東1丁 SKT240地点 浜寺石津町東遺跡発掘調査概要報告』堺市教育委員会
70. 堺市立埋蔵文化財センター2005『堺市埋蔵文化財調査概要報告109：堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告』堺市教育委員会
71. 大阪府文化財センター2008『大阪府文化財センター調査報告書177：堺環濠都市遺跡 1（SKT959地点）』大阪府文化財センター
72. 堺市市長公室文化部文化財課 2010『堺市埋蔵文化財調査概要報告130：堺環濠都市遺跡（SKT989）発掘調査概要報告 堺区熊野町西1丁所在』堺市教育委員会
73. 和歌山県教育委員会 1979『根来寺坊院跡発掘調査概要2』和歌山県教育委員会
74. 和歌山県教育委員会 1986『根来寺坊院跡』和歌山県教育委員会
75. 財団法人和歌山県文化センター1989『根来寺坊院跡』和歌山県文化財センター
76. 和歌山県文化財センター1994『根来寺坊院跡』和歌山県文化財センター
77. 岩出町教育委員会 2002『岩出町内遺跡発掘調査概要』岩出町教育委員会
78. 和歌山県文化財センター1991『鳥居遺跡発掘調査概要』和歌山県文化財センター
79. 姫路市教育委員会 1975『姫路市文化財調査報告5：加茂遺跡』姫路市教育委員会
80. 姫路市教育委員会 1984『本町遺跡』姫路市教育委員会
81. 姫路市埋蔵文化財センター2020『姫路市埋蔵文化財センター調査報告93：姫路城域下町跡』姫路市教育委員会
82. 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所編 1991『兵庫県文化財調査報告／兵庫県教育委員会編、第94冊94：福田片岡遺跡』兵庫県教育委員会
83. 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1992『兵庫県文化財調査報告113：叶堂城跡』兵庫県教育委員会
84. 備前焼紀年銘土型調査委員会編 1998『備前焼紀

- 年銘土型調査報告書』備前市教育委員会
85. 吉井町教育委員会 1990『備前周匝茶臼山城址発掘調査報告書』吉井町教育委員会
 86. 広島県教育委員会事務局教育部文化課中世城館遺跡調査班 1994『中世城館遺跡保存整備事業発掘調査報告 2：万徳院跡第 2 次』広島県教育委員会
 87. 徳島県埋蔵文化財センター 1995『徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 9：四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 9』徳島県教育委員会・徳島県埋蔵文化財センター・日本道路公団
 88. 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1982『北九州市埋蔵文化財調査報告書 12：茶屋原西遺跡別冊』北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室
 89. 大阪府文化財センター 2012『大阪府文化財センター調査報告書 231：並松町遺跡』大阪府文化財センター

2022年度年報

2022年度の考古学・文化遺産専攻および専修の活動報告

2022年度はコロナ禍が続くものの、授業は対面で実施されました。花見、研究室旅行、忘年会、謝恩会などの飲食を伴う研究室行事は行えませんでした。談話会や卒論・修論発表会などは対面でおこなうことができ、通常に近い状況に戻りつつあります。

2023年度4月より、高正龍先生の後任として岡寺良先生が着任されました。また、新たに49名の専攻生（基礎講義受講生）と、6名の大学院生（1回生）を迎え、新学期が始まり活気のある研究室になっています。FAゼミは杉沢遺跡の報告書作成、FBゼミは埴輪焼成実験のための埴輪作成、FCゼミは篠窯跡の分布調査、FDゼミは遺跡踏査など活発に活動をおこなっています。今年は、大学院生と教員での歓迎会を実施し、研究室旅行や忘年会をおこなう予定です。

卒業・修了生

2022年9月 修了生 1名（修士論文は2022年3月提出済）

2023年3月 卒業生 33名、修了生 4名

文化財専門職への就職状況

平塚市（3月卒業生）

京都府埋蔵文化財調査研究センター（3月修了生）

釈迦堂遺跡博物館（3月修了生）

備前市（博士課程前期課程在学）

卒業論文題目

スポーツ博物館 ― 展示活動に関する実態調査と提言 ―

京都府内の遺跡保存と活用に関する現状と提言 ― 縄文・弥生時代竪穴住居出土遺跡の事例 ―

縄文後期芥川式土器の諸属性の検討

御物石器の形態と石材の関係

関東地方北部における押型文土器の編年

西日本における「環状列石」遺構の研究

近畿東海南関東沿岸部に於ける南海産打ち上げ貝の分布調査 ― タカラガイ、イモガイ、オオツノハを中心として ―

龍としての藍胎漆器の特殊性

東日本における人面付土器について

弥生時代における朱の生産と使用 ― 若杉山遺跡を中心に ―

古墳造出の展開と祭祀の変容

櫓作りの琴の集成と分類 ― 弥生・古墳時代を中心に ―

弥生時代における木偶

5世紀以降の北部九州と大和盆地出土鉄釘の比較

弥生・古墳時代における斧柄の変遷とその意義 ― 近畿地方を中心として ―

生駒西麓地域における古墳時代中期の土器生産様相 ― 土器器高坏を中心として ―

弥生時代の明石川流域集落遺跡における人口研究

弥生時代の出雲・西伯耆地域における墓域の立地 ― 四隅突出型墳丘墓を中心に ―

舌からみる筒形銅器の性質

埋葬施設数からみた西播磨地域の前～中期古墳

南山城地域における弥生～古墳時代集落遺跡の植生の検討

初期色絵陶磁器の京都への流通について

中世瓦の編年研究における吊り紐痕の有用性について

近世京都における点茶についての考古学研究

紀州備長炭に関する研究

中世西日本における陶器製大甕の容量とその変遷 ― 備前焼大甕を中心に ―

立命館大学所蔵友禪図案第 6 群資料の年代特定に向けて ― 書き込みと裏打ち文書から ―

日中の刀剣から見る日本刀剣の変遷 ― 古代から中世における刀剣類を中心として ―

終末期における珠洲焼の流通の様相

石材から見た京都キリシタン墓碑の研究

立地から見る古墳及び終末期古墳と火葬墓の関係性 ― 大阪府柏原市内を中心に ―

転用石の使用目的について ― 近畿の近世城郭を中心に ―

飛鳥地域の池遺構とその用途 ― 古代庭園を中心に ―

斎宮における土馬祭祀の在り方について ― 比較と実験から従来の土馬像を見つめなおす ―

修士論文題目

縄文時代における大珠の社会的価値

中世前期における城館の防御施設と軍事機能 ― 山形県と福島県を中心に ―

12 世紀後半から 13 世紀前半にかけての中央官衙系瓦屋の動向 ― 道具とそこに残された工人の足跡 ―

風鐸考 ― 通史的試み ―

立命館大学考古学研究報告 1 *Digging Up*

発 行 日 2023 年 6 月 30 日

編集・発行 立命館大学考古学・文化遺産専攻

〒 603-8577 京都市北区等持院北町 56-1

立命館大学文学部考古学研究室気付

TEL 075-465-1111 (代) 内線 3365

印 刷 所 株式会社 北斗プリント社

〒 606-8540 京都市左京区下鴨高木町 38-2

TEL 075-791-6125

ISBN978-4-89467-481-3